注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
問題児の世界に神々の親友が来るそうですよ？

【作者名】
クロ獅子

【あらすじ】
普通にいつも通りの日常を過ごしていたら、突然目の前が真っ暗になった。目を覚ましたらなぜか神様と名乗る青年と熾天使と名乗る美女に遭遇。　お詫びに転生？問題児の世界？どういう事だ？とりあえず説明してくれ・・・。
どうも皆様初めまして！クロ獅子と申します。今回、初めての神様転生ものを書かせて戴いました！お気に召されるかどうかはわかりませんが、楽しんでいただけると幸いです。これからもどうぞよろしくお願いいたしますｍ（＿＿）ｍ。ボーイズラブ、ガールズラブは保険として入れています。

～神々の出来事～

「う～ん、最近全然仕事が減らない・・・。」

そうつぶやきながら手に３ＤＳを持ち、山のような書類が置かれた机を前に一人の青年がいた。

純金のような色をした髪をしていて肌は白く、眼は澄んだエメラルドのような色をしていた。

その姿を見れば女性だけではなく、男性でも二度見してしまう容姿を持っていた。

ダッダッダッ・・・

「失礼します!!」

そう言って一人の女性が入ってきた。

その姿は男性はもちろん、女性さえもが魅了されしまうような体形を持ち、西洋人形の様な顔を持っていた。

髪は腰までの長さがあり、美しくきらめく銀色の髪はまるで宝石のようだった。

「ハァ・・・また仕事をさぼって、いい加減にしてください！」

大声で３ＤＳをしている青年を怒鳴る。

「えぇ～～だって片づけても片づけてもきりが無いもん。」

そう言って青年は女性に口答えをする。

「当たり前です！それがあなたの仕事でしょう！ちゃんと自覚してください、ゼウス様！」

それを聞いて青年はため息をつく。

「いや、そういっても仕事はめんどくさいし・・
少しくらい大目に見てくれない？ラファエル。」

目の前の女性はそれを聞いて、

「だったら遊んでないで少しは仕事をしてください！
ただでさえお仕事がまだまだ残っているというのに！」

そう言ってラファエルはため息をつく。

それに対しゼウスは、

「えぇ～面倒・・わかったよ。ちゃんと仕事するから・・・
その手に持ってるロンギヌスの槍を下して！」

そうラファエルに悲願するゼウス。

「わかればいいんです、とにかく頑張ってくださいゼウス様。
私は紅茶でも入れてきますから。」

そう言ってラファエルは部屋から退出する。

そしてゼウスは、

「はぁ～、やっとだよ、ラファエルのお説教は毎度毎度堪えるな～。」

そう言って安堵の溜息をつく。

「大体ラファエルはいちいち細かいんだよ。
もう少しゆるくてもいいと思うんだけどな～。」

そう呟いた瞬間、

「あら～～これでも私はあなたにかなり優しくしているつもりなんですが・・・。」

ビクッ！

「や、やあラファエル・・・いつからいたの・・・？」

とゼウスが恐る恐るラファエルに尋ねる。

「そうですね、「大体ラファエルは・・」のあたりからですかね。」

「ほとんど最初から!?」

そう驚くゼウスを前にラファエルは、

「そうですね・・ 確かに言われてみればそうかもしれませんね。」

そういて考え込むラファエル。

その様子を見たゼウスは「えっ、ラファエル、怒ってないの？」

と尋ねる。

それに対しラファエルは、とても優しい顔で、

「はい、確かに言われてみれば私も行動を改める必要があるのかもしれませんし。」と発言する。

「ラ、ラファエル・・」

その様子を見てゼウスは安心する。

しかし、その直後に、

「はい私がもっと厳しくあなたを注意すれば、
このような状況は起こらなかったでしょうから。」
とラファエルが発言する。

その言葉を聞いてゼウスは体を固まらせる。

「え、ラ・ラファエルさん・・?」

「安心してください、私も今回の行動には反省しておりますゆえ・・・
あなたのゲーム機や漫画、およびラノベはすべて破壊しました。」

「僕の神器がああああああぁぁぁぁぁ!!!??」と絶叫するゼウス。

それの様子を見たラファエルはいい笑顔で、
「さあ、これで仕事の邪魔をするものはなくなりました、安心して仕事に取り組んでください、ゼウス様♪ 」

それを聞いたゼウスはヨロヨロと立ち上がり、書類の山の中から1枚の紙を手に取った。

「フ、フフフフフ・・・こ」「こ?」ラファエルが尋ねると、

ゼウスは「こんなものがあるからいけないんじゃあああああああぁぁぁぁ!!!」
と、手に持っていた書類をビリビリと破く。

それを見たラファエルは驚愕の表情で「ゼ、ゼウス様!?何を!?」と大声で尋ねる。

それに対し、ゼウスはまだ書類を破いている。

「お、落ち着いてください！ゼウス様！」そう言ってドロップキックをゼウスに食らわせる。

「ドグホッ！」

強烈なドロップキックを食らったゼウスは吹っ飛ぶ。

「い、痛たた・・・なんだよラファエルそんなに慌てて、たかが書類を一枚破っただけじゃないか・・・。」

それに対してラファエルは「あなたはバカですか!?今あなたが破いたのは、人間の一生を表したものです！それを破いたということは！」

それを聞いてゼウスは青ざめる。

「も・もしかして・・・やっちゃった？」

「そうですよ！しかも強制的にその人の人生を終わらせたので、輪廻の輪入ることもできなくなったんですよ!?このままでは・・・」

それを聞いてゼウスは、

「ッ！急いでその魂を神の間へ持ってきてくれ!!」

「わかってますよ！」

そう言ってラファエルは４枚の純白の翼を出して全力で移動する。

「ハァ・・ぼくも行かないと。」

そう言ってゼウスは６枚の純白の翼を出して部屋から消える。

残ったのは静寂に満ちた白い空間だけだった。

～神との遭遇～

ある空間に一人の青年が横たわっていた。

「う・うう・・・。」

青年が目を覚まして映ったのは、真っ白な空間だった。

「ど、何処だ？ここは・・・。」

俺は確か・・いつもどうりに家に帰って、

そのまま自分の部屋でくつろいでいたはずなんだが・・・。

「いったいここは何処だ？おｒ「やあ、気がついたみたいだね。」っ！
誰だ！」

つい大声で怒鳴ってしまった。

声がした方に向いて見ると、

そこには美しい・・・変態がいた。

「ちょ・ちょっと待ってよ！僕は変態じゃないよ！僕は神だよ！」

は？紙「紙じゃない！か・み！神様！Ｇｏｄ！」

そ・そうか・・・とりあえず。

「良い精神科、紹介してやろうか？」

こいつ、やっぱり変態だわ。

「え、ちょ、何で!?
何で僕は今痛い人を見るような目で見られてるの!?」

何でって、そりゃあ・・・

「見たことない場所で初めて会った奴が翼を6枚も生やしていて、
僕は神だよ、なんて言われて「はい、そうですか。」なんて言えると
思うか?」

「・・・うん、普通は無理だね・・・。」

「わかってくれて何よりだ、それより変態が俺になんのようだ?」

「だ・だから僕はh「うるさいですよ。」グハァ!」

おお、変態が美女にドロップキックをされて、
吹っ飛んだ。きれいに決まったな。

「すみません、ご迷惑をお掛けしてしまって・・・。」

「いや、元々こっちが先に初めたんだ、気にしないでくれ。」

「そう言って頂けると、助かります。」

なんて話をしていると、

「う~ん、イテテ、酷いな、ラファエル。」

あいつが起きてきた。

「当たり前です、説明もしないでいつまでも下らない事をしているからですよゼウス様。」

「ア・アハハ・・ごめんごめん。」

と、一段落着いた所で俺は質問をした。

「で、聞きたいんだか、何で俺はこんな所にいるんだ？」

ギクッ「そ、それは・・・。」

～神様と天使、青年に説明中～

「なるほどな、つまり俺はそいつの不手際で死んでしまい、今こうして最高神であるゼウスと、大天使であるラファエルの前にいる、と。」

俺がそう呟いた瞬間に、

「すいませんでしたあぁぁぁぁ!!」ゼウスが土下座した。

「わざとじゃないんです！どうかボッコボコにするのだけはご勘弁を!!」おお、凄い勢いで悲願してくる。

「いや、俺はお前をボッコボコにするつもりは無い、だから頭をあげてくれ。」

「えっ？」

ゼウスはまるであり得ないというような顔で俺を見てくる。

するとラファエルが俺に聞いてきた。

「良いのですか？確かにわざとではないとはいえ、あなたを殺してしまったのは事実です。

普通なら半殺し位にはするとは思いますが？」

「ちょっ、ラファエル!?何煽ってんの!?」

「うるさいです。」

おお、きれいに切り捨てたな。

「それで、どうなんですか？」

「確かに、わざとだったら虫の息になるまでまでボッコボコにしていただろうな。」

それを聞いてゼウスは冷や汗を流す。

「だが、わざとじゃないんなら俺がそうする必要もない、それに・・・。」

『それに？』

「人間だって失敗はするんだ、神様だけに完璧を押し付けるのも・・・な？」

それを聞いたゼウスは突然、

「ぷっ、あはははははは!!」

凄い勢いで笑い出した、何だ？壊れたか？

「違うよ！はあっあ～～笑った笑った、君変わってるね。」

「そうか？普通だと思うんだが・・・。」

「しかも普通って、やっぱり変わってるね、凄く気に入ったよ！」

「最高神に気に入って頂けるとは、光栄だな。
それで、俺はこれからどうなるんだ？天国か地獄にいくのか？」

俺はずっと気になっていたことをゼウスに聞いた。

「いや、君は天国にも地獄にもいかないよ。
君には転生をしてもらう。」

「転生？転生ってあの輪廻転生のことか？」

「う～ん、少し違うね、普通は魂は体が死んだら輪廻の輪に入って一から新しい人生を送るんだけど、
君の場合は特別に、そのままの姿で転生することも出来るし、
赤ちゃんから転生する事も出来るし、姿を変えて、転生する事もできるよ。
更に、本当なら転生する際に特典をいくつかつけようと思っていたけど、
僕は君が気に入った、だから好きなだけ特典をつけてあげる。」

「良いのか？そんな事をして？」

「いっただろう？僕は君が気に入った、だからだよ　。」

「そうか。」

「所で、僕たちはまだ君の名前を聞いて無いんだけど・・・教えてくれないかな？」

「そういえば、そうだったな、俺の名前は、神谷　結城　だ、よろしくな。」

「うん、よろしく、神谷くん。」

「結城でいい、ゼウス、それより俺は、これから転生するのか？」

「ああ、それなんだけど、結城君がこれから行く世界は、『問題児たちが異世界からくるそうですよ？』という世界だ。」

「ああ、それなら知ってるぞ、好きだったからな。」

「なら話は早いね、さあ！好きなだけどうぞ！」

「そうか、なら、俺がいた世界での家族や友達が幸せになれるように約束してくれ。」

「うん、それなら勿論！で、他には？」

「ない。」

「えっ？」

「これ以上は俺から無いな、もし良ければゼウスが決めてくれないか？」

「良いのかい？」

「ああ、頼む。」

「・・・わかった、最高の特典を用意しておくね。」

「助かる、あとは俺のわがまま何だが・・・いいだろうか？」

「当たり前だよ！僕は君が気に入ったからね♪さあどうぞ。」

「それじゃあ・・・俺に修行をつけてくれないか？」

そう言って、俺は頭を下げた。

それを見たゼウスは慌てて、

「あ、頭を上げてくれ！」

と、言ってきた。

「一応、理由を聞いてもいいかな？。」

「ああ、どんなに強い力を持っても、使いきれる様にならないと意味がないだろう？

それに、向こうの世界では、努力して強くなった奴もいるんだ。

それなのに何もしないで強くなるってのは俺自身が嫌なんだ。」

「・・・ふふ、やっぱり君は想像・・・いやそれ以上に面白いよ。

解ったよ、他ならぬ君の頼みだ、でも、僕は甘く無いよ？」

「ああ、望むところだ！」

「ゼウス様、修行をつけるのはいいですけど、お仕事の方を忘れてはいませんよね？」

「うっ！そ、そこをどうにかなら無いかな？ラファエル？」

「・・・はぁ、わかりました、私もできるだけお手伝い致します。」

「ありがとう！ラファエル！というわけでこれからバンバン行くよ？結城君？」

「ああ！これから宜しく！ゼウス！」

～神達との別れ～

ある真っ白な空間に一人の青年と、神がいた。

「もう１０年か・・・。」

そう呟く青年の名前は、神谷結城、ゼウスによって生き返った人間だ。

「うん、今まで良く頑張ったね、結城君」

結城を褒めるこの神は、最高神ゼウスだ。

「ああ、今まで世話になったな、ゼウス。」

「いいや、君は本当に良く頑張ったよ、僕たちが出した修行の内容を、弱音を一切吐かずにやり遂げたんだからね。」

そう言葉を酌み交わす二人は、親友のようだった。

「所で結城君、そろそろ君を問題児の世界に送りたいと思うんだけど。」

「分かった、・・・なあゼウス、問題児の世界に行く前に今まで世話になった神の皆に挨拶を済ませたいんだが・・いいか？」

「うん、別に急いでいる訳じゃないし、いっておいで、皆待ってると思うよ。」

「ありがとう。」

そう言って、部屋を出る結城を見て、ゼウスは呟く。

「１０年、か・・ふふ、初めてだよ、僕たち神にとって1秒にも満たない時間がこんなにも長く感じたのは。」

そう言って、ゼウスは少し寂しそうに言った。

「本当は、もう少し一緒に居たいんだけどね。
でも、それじゃあ結城君の為にはならないしね。」

その頃、結城は神達に挨拶をする為に歩いていた。

「ん?あれは・・・。」

結城が見た先に居たのはラファエルだった。

「ラファエル。」

「あれ?結城さん、どうしたんですか?」

「いや、もうすぐ問題児の世界に行くんでな、今まで世話になった皆に別れの挨拶をしようと思ってな。」

「っ!そうですか・・・もうそんな時なんですね・・・。」

「ああ、ラファエル、今まで世話になった、ありがとうな。」

「・・いいえ、お礼を言うのはこちらの方です、結城さんがいたお陰でゼウス様もちゃんと仕事をする様になりましたから。」

それを聞いて結城は少し笑う。

「ふっ、そうか、ならよかった。」

「はい、それより早く他の神様方にご挨拶をなさってください。」

「ああ、じゃあな、今までありがとう、ラファエル。」

そう言って歩いて行く結城を見て

「はぁ、もうお別れですか・・時々アプローチはしてたのに・・・・・結城さんの鈍感・・・。」

そう呟くラファエルだった。

その頃、結城は様々な神達と、挨拶を交わしていた。

創造を司る神ブラフマーや知恵や英知を司る神アテナ、戦争と死を司る神オーディン、武神スサノオ、太陽神アマテラス、冥界神ハデスｅｔｒ・・

沢山の神に挨拶を済ませた、中にはなぜか落ち込んでいた神達もいた、なぜだ？

そして、やる事を終えて、ゼウスがいる部屋に戻ってきた。

「やあ、結城君、もう他の神達に挨拶は済ませたのかい？」

「ああ、全員に済ませたぞ、なぜか突然落ち込んだ奴もいたがな。」

「そりゃあ、結城君はもう僕達、神々の親友だからね、全員別れるのが寂しく思っているんだと思うよ。」

「そうか、俺も寂しいな。」

「あはは、（まあ・・・中には結城君に恋心を抱いてた神もいたしね・・・。）
それよりも、もう出発するかい？」

「ああ、頼む。」

「うん、じゃあ!!」

パチンッ！と、ゼウスが指を鳴らした瞬間に手紙が落ちてきた。
見てみると、『神谷　結城　様へ』と書かれている。

「それを開ければ、問題児の世界に行けるよ。」

「分かった、ゼウス、色々とありがとうな、本当に感謝してる。」

「いや、これは元々僕が起こした原因だからね、結城君、気を付けてね・・・。」

「・・・おう、じゃあな、いってくるぞ、ゼウス！」

「ああ！頑張ってね！結城!!」

そう言って結城は手紙を開き、消えた。

「・・・他の神達も結城に加護を与えているね。
かくいう僕もなんだけどね、特典もかなり凄いのをあげたけど、
１０年間の修行で完全に使いこなせるようになったしね。
神々の親友、神谷結城の人生に祝福を・・・。」

そうゼウスは祈った。

～主人公設定～

主人公紹介

名前　神谷　結城（かみや　ゆうき）

性別　男

年齢　１７歳

性格

仲間にはとても優しく、敵には厳しい性格を持つ。

一人称は「俺」

冷静な所が多く、悪ノリがあまり得意ではない、しかし神界で１０年間を過ごし、少しは悪ノリができるようになった。

ゲームや小説が結構好きで、前世では良くはまっていた。

自分を犠牲にしてでも、仲間や友達、親友は助けようとする。

家事は得意で何でもこなすが、ゼウスからもらった特典で様々な事ができるようになった為、腕が上がっている。

元から身体能力と、頭がよかったが、神界で修行して、異常な位に上がっている。

武器も神から教えてもらい、様々なものが使える。

また、女性の神や天使から何度かアプローチを受けているが、鈍感なのか、修行に専念していたのか、気づかなかった。

偽善をもっとも嫌うが、【罪を憎んで人を憎まず】を心がけている。

モデル・容姿

『ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ―奪還屋―』の風鳥院花月。

髪は青みがかかった黒で、腰のあたりまで伸ばしたストレート。

ボイス
子安武人

能力
沢山の神々から加護を受け取っている為、大概の事は何でもできる。
しかし、人や生き物を生き返らせる事はできない、その代わり、少しでも息があれば完全に治癒したり、治したりできる。
漫画やゲームのモンスターやキャラクター、道具等は能力で作り出す事ができるが、消す事は本人によれば「嫌だ！」と、言うことらしいので、別空間にすんでもらっている。
例）トリコの食材→フグ鯨、ジュエルミート、センチュリースープ、虹の実など
パズドラやドラゴンクエスト等→神龍、伝説竜、機械龍、エンジュリオン、フォートトイプス等
ドラゴンクエストやＦＦの武具→天空の剣、光の盾、世界樹の葉など

好きな物
仲間、楽しい事、美味しい物

嫌いな物
外道、嘘、命を粗末にする事

趣味
歌、楽器、家事、お世話

結城より一言
「仲間は絶対に守る！」

ゼウス
結城を間違えて殺してしまった張本人。
最高神の一人であり、性格はともかく、実力は半端無く強い。
片付けてもきりがない書類仕事が嫌で、あまり表には出さないが、地球のゲームやラノベにめちゃくちゃはまっている
容姿はとても整っていて、体型もしっかりと引き締まっている。
結城が神界にいた１０年間はとても充実した時間で、結城の一番仲が良い友人になった。
その為、神の中でも結城の事を特に心配して、見守っている

本人から一言「結城君、楽しんでおいで！」

ラファエル
最高神ゼウスの秘書の様な存在で、いつもいつもあまり仕事をしないゼウスに苦労していた。
容姿は絶世の美女で男性だけじゃなく女性さえもが振り向いてしまう美しさを持つ。
弱音を吐かず、修行を頑張った結城の姿に心を打たれ、片思いしている。

本人から一言「今度はいつ、結城さんに会えるでしょうか・・・。」

～神々の親友が箱庭に来るそうですよ？～

ある４人の問題児の元に手紙が何処からか届いた。

その手紙にはこう記されてあった。

――――『悩み多しの異才を持つ少年少女に告げる。

その才能を試すことを望むならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らが箱庭に来られたし』――――

そしてその手紙は４人の問題児の元へ届く

一つは河原で寝そべっていた、金髪のヘッドホンを着けた快楽主義者の少年の元へ。

一つは部屋の中にいた、高圧的なお嬢様の少女の元へ。

一つは友達である猫が持ってきた手紙をみる無表情な少女の元へ。

一つは神の手違いで殺されたにもかかわらず、許し、親友になった大和撫子の様な少年の元へ。

問題児達は様々な反応を示したが、その手紙を開封した。

「うおっ!?」「きゃっ!?」
「えっ!?」「にゃあ!?」「ついに来た!!」

手紙を開封した瞬間に、彼らの目の前に広がっていたのは・・・完全無欠の異世界だった。

これから始まる新しい冒険や、生活を想像して、結城は嬉しそうに笑った。

今、彼らの目の前に映っている風景は、現代の世界にあるコンクリートやビルの様な建物は全く無く、代わりに広がっているのは広大な大自然と美しい小川だった。

普通ならば絶対に見る事のできないこの景色を楽しみたい所だが、彼らにはそんな余裕が全く無かった。

なぜなら・・・・・

高度約４０００メートルという高さから、パラシュート無しのスカイダイビングを体験していたから。

「不味いな・・・。」と、呟く結城。
それも仕方ない、どんなに頑丈な人間でも、高度約４０００メートルの高さから落ちたりすれば、無事では済まない。

幸い、衝撃緩和材のつもりか、薄い水の膜が途中で何枚か張られている為、命に関わる事は無いだろうが、ずぶ濡れになるのは遠慮した

い。

そう思った結城は、最高神ゼウスからもらった特典の力を使って、前世ではまっていたあるゲームのモンスターを呼び出す。

「来てくれ！樹天龍ホウライ!!」

そう叫ぶと、魔方陣の様なものが現れ、中から緑色をした龍が現れる。

「グオオオォォァァァァァ!!!!」

龍は猛々しく雄叫びをあげると、直ぐに結城を背中に乗せる。

「ありがとう、ホウライ♪他の皆も助けてあげてくれ！」

そう命令すると、樹天龍ホウライは「任せろ！」と、唸り声をあげて問題児達を救出する。

「きゃあ！何!?」「嘘・・・!?」「ヤハハ！オイオイマジかよ!!」

突然自分たちを助けた龍に驚きを表す問題児達だが、今は無視して樹天龍ホウライに地面に向かって貰う様に頼む。

ゆっくりと地面に降りた樹天龍ホウライを撫でながら、

「ありがとうホウライ、お陰で助かった。」

そうお礼を言うと、樹天龍ホウライは「気にするな。」と唸り、魔方陣から消えていった。

暫くして問題児達が、口々に文句を良い始める。

「し、信じられないわ！まさかいきなり引き摺りこんだ挙げ句に、問答無用で空に放り出す何て!!」

「右に同じだ、クソッタレ。

場合によっちゃあその場でゲームオーバーだぜコレ、

石の中に呼び出された方がまだ親切だ。」

「いえ、石の中じゃ動けないでしょう？」

「俺は問題ない。」

「そう、身勝手ね。」

「此処・・・・・何処だろう？」

「さあな、さっき世界の果てみたいなものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃないか？」

・・・うん、実際にみてみると、全員物凄い性格がねじ曲がっているな・・・。

「俺、問題児!!」とか「お嬢様!!」とか「無関心!!」みたいなオーラがバンバン伝わって来るぞ・・・。

ていうか、十六夜はよくあの状況で確認出来たな。

大亀の背中ってあれか？インド人の宇宙観理論か？

見た目によらず博識なんだな・・・。

超個性的な問題児達を目の前にして、結城は少し苦笑いをした。

～神々の親友が黒ウサギに出会うそうですよ？～

暫くすると、十六夜が俺達の方に向いて喋り始めた。

「まず確認の為に聞いておくが・・・お前らにもあの変な手紙が？」

「そうだけど、まずその【オマエ】って呼び方を訂正してくださる？私には、【久遠　飛鳥】って名前があるの。」

そう十六夜に言い返すと、久遠は、猫にかまっている少女に視線を向けた。

「それで、そちらの猫を抱えている貴方は？」

「・・・【春日部　耀】。以下同文」

「そう、よろしく春日部さん。そこの野蛮で凶暴そうな貴方は？」

ここまでくると、尊敬の念さえ覚えるな・・・。

初めてあったばかりの奴の奴にこんなに高圧的な態度を取れるなんてな・・・。

「これはこれは、高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な【逆廻　十六夜】です。

粗暴で凶悪で快楽主義と三拍子揃ったダメ人間なので、

用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様？」

「そう。取り扱い説明書をくれたら、考えてあげるわ、十六夜君。」

「ヤハハ、マジかよ。今度作っとくから覚悟しとけ、お嬢様。」

そういった十六夜はこちらを見た。

はぁ、やっとか。やっと自己紹介が出来るな。

「それで、そこの和服あんたの事をまだ聞いて無かったな。」

「ああ、俺か？俺の名前は【神谷　結城】だ。

間違いを許し、外道を嫌うものだ。どうぞよろしく。」

そう言って、優しく微笑む。

ちなみに和服は普段過ごしやすいからだ。前世でも神界でも、よく和服は着ていたしな。

「・・・・大変失礼なのだけれど、神谷さんは女性かしら？男性かしら？」

久遠はそう俺に訪ねてくる。

・・・まあ、しょうがないよな。前世でも散々間違われたし・・・。

「久遠さん・・・・悪いが俺は男だ。」

そう言うと、三人は驚きの表情で俺を見る。

今まで無関心だった春日部まで反応したぞ・・・・。

「ご、ごめんなさい・・私はてっきり女性かと思っていたわ。」

「ヤハハ、俺もてっきり女かと思ったぜ。」

「(こくこく・・)」

「ははは・・・もうなれているよ、大丈夫だ。」

「それよりも、さっき俺達が落下してたとき、龍を出して助けたのは、お前か?」

十六夜がそう聞いてくる。

「ああ、あれは俺の友達の1人だ。」

俺がそう言うと問題児達が様々な反応を示す。

「そうだったの。ありがとう神谷さんお陰で助かったわ。」

「結城で良い、敬語も必要ない。その代わり、俺も飛鳥と呼ばせて貰って良いか?」

「ええ、良いわよ結城君。改めてお礼をさせて貰うわ、ありがとう。」

「別に良いぞ。怪我がなくて何よりだ。」

「ヤハハ!すげぇなお前!あんな龍が友達なのか!!」

と、詰め寄ってくる十六夜。凄い嬉しそうだな。

「ああ、あいつは樹天龍ホウライといってな。

まだまだ沢山の友達がいるぞ。」

そう言うと十六夜ではなく、春日部が話かけてきた。

「本当・・!?他にはどんなのがいるの!?」

おおう・・・凄い反応だな。他の二人もビックリしてるぞ。

「また今度紹介してやるよ。それまでのお楽しみな。」

そう言うと、春日部はしぶしぶ引き下がった。

「・・・わかった。」

楽しそうにケラケラと笑う【逆廻　十六夜】

傲慢そうに腕を組む【久遠　飛鳥】

猫を抱え、無表情を装う【春日部　耀】

その問題児達を見て微笑んでいる【神谷　結城】

そんな彼らを物陰から観察していた人物がいた。

（うわぁ・・・なんかお一人を除いて問題児ばかり見たいですねぇ・・・。）

彼らを見てそんなことを思っていた。

暫くして、十六夜が苛立たしげに喋り始めた。

「で、呼び出されたのはいいけど、何で誰もいねぇんだよ？

この状況だと、説明する奴位誰かいるんじゃあねえか？」

「そうね、何の説明も無いままでは動き様がないもの。」

「・・・・・この状況で落ち着き過ぎてるのもどうかと思うけど・・・。」

「それ、春日部が言うか。」

（全くデス。）

とりあえず黒ウサギ、もっとちゃんと隠れろよ・・・気配駄々漏れだぞ・・・。

「――仕方ねえ、こうなったらそこに隠れている奴にでも話を聞くか？」

（ビクッ!!）

ああ、黒ウサギもっと速く出てきてたら良かったのに・・・。

「なんだ、貴方も気づいてたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そっちの二人も気づいてたん

だろ？」

「・・風上に立たれたら嫌でも解る。」

「いや、あれを隠れているといったら無理があるだろ・・・。」

「へえ・・・おもしれぇな、お前ら」

目が笑っていないぞ・・十六夜、まさかターゲットにされたか？

そんな中、黒ウサギが恐る恐る出てきた。

「や、やだなぁ、御四人様。

そんな狼見たいな怖い顔で見られると、黒ウサギが死んじゃいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼は、

ウサギの天敵でございます。

そんな黒ウサギの軟弱な心に免じて、ここは穏便にお話を聞いていただけたら嬉しいで御座いますよぅ？」

「断る。」

「却下。」

「お断りします。」

「まあ・・聞くぐらいなら。」

「あはっ♪取り付くシマもないデスね、そして最後方、ありがとうござ

います！」

バンザーイと、降参のポーズを取る黒ウサギ。

しかしその目は冷静に俺達を値踏みするかのように見ていた。

そんな中、春日部が黒ウサギに近付いて・・・。

「えい。」

「ふぎゃ!?

・・・おもいっきり根元から耳を引っ張っていた。

あれはいたそうだな。

「ちょ、ちょっとお待ちを！触るだけなら黙って受け入れますが、まさか初対面の黒ウサギの素敵耳を遠慮無用で

引き抜きに掛かるとは、どういう了見デスか!?」

「・・・好奇心の為せる技。」

「自由にも程があります！」

そんな黒ウサギに追い打ちをかけるように、

「へえ、このうさ耳本物なのか。」

「じゃあ、私も。」

そんな状況で黒ウサギは俺に助けを求めてきた。

う～～～ん。

「おーい、皆引っ張り抜くのは可哀想だから、せめて撫でる程度にしてあげてくれないか？」

「・・・まあ、結城君が言うなら仕方ないわね、助けて貰ったし。」

「そうだな、結城に免じて、この場は引いてやるか。」

「・・・分かった、でも撫でるのは良いんだよね？」

「あっ、はい！勿論です！

最後の御方、ありがとうございます!!」

そう言って問題児達は黒ウサギの耳を優しく触っていた。

黒ウサギも気持ち良さそうだった。

～神々の親友が箱庭の説明を聞くそうですよ？～

「それで、そろそろ説明してくれないか？」

全員黒ウサギの耳を撫でるのを満足した所で俺は黒ウサギに頼んだ。

他の皆も聞く用意はできていた。

「あっ、はい！それではいいですか、御四人様。定例文で言いますよ？いいｍ「さっさと言え」・・・ようこそ！

我らが【箱庭】の世界へ！

我々は御四人様にギフトを、与えられた者だけが参加できる【ギフトゲーム】への参加資格をプレゼンさせて

頂こうと思い、皆様を召喚いたしました！」

「「ギフトゲーム？」」

「そうです！既にお気づきになられていると思われますが、皆様は全員、普通の人間ではございません！

その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵なのでございます。

【ギフトゲーム】はその【恩恵】を用いて競い合うためのゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つ

ギフト保持者がおもしろおかしく生活できる為に創られたステージなのでございますよ!!」

大げさに手を広げて、俺達に説明していく黒ウサギ。

成る程な・・・確かに今の俺の力や能力はゼウスを初め、いろんな最高神から貰ったものだしな・・・。

すると、飛鳥がその説明に対して、質問をするために手を挙げていた。

「まず、初歩的な質問からしていい？

貴方の言う【我々】とは、貴女を含めた誰かなの？」

「Ｙａｓ！異世界から呼び出されたギフト保持者は生活するにあたって、数多く存在する

【コミュニティ】に所属していただきます♪」

「嫌だね。」

十六夜、否定するの早いな・・・コンマ数秒位だったぞ・・・。

「属していただきます!!!!

そして【ギフトゲーム】の勝者はゲームの【主催者】が提供した賞品をゲットできるという

とってもシンプルな構造になっております。」

ん？なんか今妙にコミュニティ所属にむきになってたな・・・。

「・・・主催者って誰？」

「様々ですね。暇をもて余した修羅神仏が人を試す為の試練と称して開催されるゲームもあれば、

コミュニティの力を誇示する為に独自開催するグループもございます。

特徴として、前者は自由参加が多いですが、【主催者】が修羅神仏なだけであって、凶悪かつ難解なものが多く、

命の危険もあるでしょう。

しかし、見返りは大きいです。【主催者】次第ですが、新たな【恩恵】を得られる事も夢ではありません。

後者は参加する為にチップを用意する必要があります。参加が敗退すればそれらは【主催者】の

コミュニティに寄贈されるシステムです。」

「後者は結構物欲ね・・・・・チップには何を？」

「それも様々ですね。金品、土地、名誉、権利、人間、・・・・そしてギフト同士を賭け合う事も可能でしょう。

ただし、ギフトを賭けた戦いになれば当然ご自分の才能も失われるのであしからず。」

黒ウサギはその笑みに黒さを混ぜる

もしかして、俺達を怖がらせているのか？

「そう。なら最後にひとつだけ質問させてもらってもよろしいかしら？」

「どうぞどうぞ♪」

「ゲームはどうやったら初められるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期間内に登録して頂ければＯＫ！商店街でも商店が

小規模のゲームを開催しているので、良かったら参加して行ってくださいな。」

「・・・つまり【ギフトゲーム】はこの世界の法そのもの、と考えて良いのかしら？」

飛鳥の言葉に黒ウサギは感心したような声を出して、またしゃべり始めた。

「ふふん？なかなか鋭いですね。

しかし、それは八割正解、二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は犯罪ですし、金品による物々交換も存在します。

・・・・・が、しかし！【ギフトゲーム】の本質は全く逆!!勝者が一方的に全てを手にするというシステムです。

店頭に置かれている賞品も、店側が提示したゲームをクリアすれば、タダで手に入れる事も可能という事ですね。」

「そう、なかなか野蛮ね。」

全く持ってそうだな。

「ごもっとも。

しかし、【主催者】は全て自己負担でゲームを開催しております。

つまり、奪われるのが嫌な腰抜けは最初からゲーム参加しなければいいだけの話でございます。」

そう告げると、黒ウサギは一枚の封書を取り出した。

「・・・さて、皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭における全ての質問に答える義務がございます。」

・・・が、それには少々お時間が掛かるでしょう。

新たな同士候補である皆様をいつまでも野外に出しておくのは忍びない……。

ここから先は我らのコミュニティのでお話させていただきたいのですが・・・よろしいでしょうか？」

「・・・待てよ、まだ俺が質問してないだろ？」

今まで清聴していた十六夜が、黒ウサギに向かって真剣な表現で話しかけた。

「・・・・どんな質問でしょうか？ルールですか？それともゲームそのものでしょうか？」

「そんなのはどうでもいい。

心の底からどうでもいいぜ。

俺が聞きたい事は一つ。

――この世界は面白いか？」

十六夜の言葉に俺を含めた全員が黒ウサギを見つめ、次の言葉に耳を傾けた。

「――Ｙａｓ♪【ギフトゲーム】は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。

箱庭の世界は外界の世界より格段に面白いと、黒ウサギは保証致します♪」

黒ウサギは目を輝かせて嬉しそうに、そして楽しそうに自信満々に答えた。

確かに、こうして直に見て、聞いて、体験してみるとすごく面白そうな世界だ。

――神界の皆、ありがとな。

神々の親友が繰り出す箱庭の物語が、今始まろうとしていた。

～神々の親友が世界の果てに行くそうですよ？～

黒ウサギたちとコミュニティに向かって歩いていると、十六夜に話しかけられた。

「なあ結城、ちょっと世界の果てまで一緒にいかねぇか？」

「世界の果てか？う～ん・・・確かに行っては見たいが黒ウサギに迷惑が掛からないか？」

「行ってきてもいいか？」なんて聞いても「駄目です！」なんて言われそうだしな。

「なら気付かれる前にとっとと行こうぜ！黒ウサギは迷惑掛けてなんぼだろ？」

十六夜・・・それはいくら何でも酷過ぎるぞ・・・・・。

このままじゃあ本当に〔黒ウサギ〕から〔苦労サギ〕なんて呼ばれるかもしれないな・・・。

「・・・しかし、せっかく箱庭なんて所に来たんだ、行かなければ損だな。」

「よっしゃ！やっぱそう来なくちゃな!!」

十六夜はそう叫ぶと、俺の腕を掴んで物凄いスピードで走り出した。

後で黒ウサギに謝らないとな・・・。

～三人称ｓａｉｄ～

十六夜と結城が世界の果てに向かってしばらくたった頃。

残った飛鳥と春日部、黒ウサギは都市の外壁まで辿り着いていた。

入り口には一人の少年が座っており、それを見た黒ウサギがピンと耳をたてて走り寄っていった。

「ジン坊っちゃ～ん!!新しい方を連れて参りましたよ～!!」

近付いてくる黒ウサギに笑顔を向ける少年は、後ろの二人を見ると、待ってましたといわんばかりに

声を掛けた。

「お帰り黒ウサギ。そちらの女性二人が？」

「はい！こちらの御四人様方が……」

クルリと振り向いた黒ウサギはそこにいるはずの存在が見当たらず、体がカチンと硬直する。

「……　え？……　あれ？私の記憶に間違いがなければ、あとお二方いませんでしたっけ？

ちょっと目付きが悪くて、口が悪くて、全身から【俺問題児！】ってオーラを出している殿方と、

可憐で、とても優しくて、和服を着ていたまるで【大和撫子】のよ

うな殿方が・・・。」

「ああ・・・・十六夜君と結城君の事？

彼らなら『ちょっと世界の果てを見て来るぜ！』っていって、あっちの方に走り去って行ったわ。

まあ・・・結城君は十六夜君に掴まれて拐われたみたいだったけどね・・・。」

飛鳥はそういい遥か遠くの断崖絶壁を指さした。

「な、なんで止めてくれなかったんですか⁉」

「だって『止めてくれるなよ』って言われたんだもの。」

「な、ならなんで黒ウサギに教えてくれなかったんですか⁉」

「・・・・・『黒ウサギにはいうなよ』と言われたから。」

「嘘です、絶対嘘です！実は面倒くさかっただけでしょう皆様方‼」

「「うん」」

黒ウサギがガックリと項垂れる中、ジンが話を聞いて蒼白になって叫ぶ。

「た、大変です！世界の果てには野放しにされている幻獣が！」

「幻獣？」

「は、はい。ギフトを持った獣を差す言葉で、出くわせば最後、とても人間が太刀打ちできる相手では有りません！」

「あら、それじゃあ彼らはもうゲームオーバーなの？」

「・・・・・ゲーム参加前にゲームオーバー？・・・・斬新？」

「冗談を言っている場合では有りません！」

ジンは彼らの身を案じているのか、事の重大さを伝えようと必死だった。

「ハァ・・・。

ジン坊っちゃん、申し訳有りませんが、御二方のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「分かったよ。黒ウサギはどうするの？」

「・・・・・問題児様方を捕まえて参ります。

・・・事のついでに【箱庭の貴族】と謳われるこの黒ウサギを馬鹿にした事を骨の髄まで後悔

させてやりますので!!」

そう言った黒ウサギの水色の綺麗な長髪が桃色に染まり、ウサ耳をピーンと立てた。

飛び上がった黒ウサギは外門の側にあった門柱に水平に張り付き、飛鳥達をみた。

「一刻ほどで戻ります！

皆様は素敵な箱庭ライフを御堪能ございませっ!!」

黒ウサギは壁に亀裂が入る程の力で飛び出していった。

その速度は、飛鳥達の視線から一瞬で消えるものだった。

「・・・・箱庭の兎は随分早く跳べるのね・・・素直に感心するわ・・・。」

「黒ウサギは箱庭の創始者の眷族。

力もそうですが、様々なギフトをあわせ持った他に特殊な権限を持ち合わせた貴種です。

彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り、大丈夫だと思うのですが・・・・。」

「・・・黒ウサギも御堪能下さいと言っていたし、お言葉に甘えるとしましょう。

貴方がエスコートしてくれるのかしら?」

「えっ・・・・・・あっ、はい！

僕はコミュニティのリーダーを勤めさせていただいております、

【ジン＝ラッセル】と申します。齢十二歳になったばかりの若輩ですが、宜しくお願いします。

よろしければ、御二人のお名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「久遠飛鳥よ。そっちで猫を抱えているのが。」

「・・・・・春日部耀。」

「・・・・さあ、さっそく箱庭に入りましょう。

まずは、そうね。軽い食事でも取りながら話を聞かせてくれると嬉しいわ。」

飛鳥達はそう言いながら、箱庭に入っていった。

～Ｓａｉｄ　Ｏｕｔ～

「なあ、結城。」

「なんだ？十六夜。」

「俺、今はかなりの速さで走ってるんだが・・・なんでついてこれるんだ？」

「これくらいなら余裕だ。なんせ、死に物狂いで修行したからな・・・。」

「そ、そうか・・・。」

なんて会話をしながら、新幹線も涙目のスピードで森の中を走っていると、

ついに世界の果てに到着した。

「こりゃすげぇ・・・。」

「これ程とはな・・・。」

俺たちの目の前に映ったのは、この世の物とは思えない程の美しい滝だった。

勢いよく流れる水はとても澄んでいて、宝石のようだった。

滝から出た水飛沫が日光で輝き、それが森と合わさって、神秘的な風景を作り出していた。

確かこの滝の名前は、【トリトニスの大滝】だったか？

俺と十六夜がしばらく滝に見とれていたら、突然滝の中からから巨大なものが現れた。

『ＧＵＧＹＡＯＯＯｏｏｏｏａａａａ!!!!』

現れたのは、巨大な蛇神だった。

実際に見るとかなりでかいな・・・。

だが、そんなに強くはないな。神界の一番弱い神の方がまだ強かったぞ。

『何故人間の小僧と小娘がこんなところにいる？』

威圧を含めた声で、俺たちに問いかけてきた。

「へぇ・・・この蛇しゃべんのか、さすが箱庭ってところだな。」

「十六夜、これは蛇じゃなく蛇神だ。といっても神を名乗れる程の強さは無いが・・・。」

俺たちがそう言うと、蛇神が怒り怒鳴った。

『貴様らぁぁぁ!!!!

誰にものを言っているのか分かっているのかぁぁぁぁ!!!!』

「「お前にだよ、蛇神（笑）」」

間髪入れずに俺たちは返した。

『いいだろう!!

貴様らには我の試練でどこまでやれるか試してやる!!』

「ハッ！寝言は寝ていえよデカ蛇。

お前が俺たちを試す事なんか出来ねえよ。

むしろ俺がお前を試したいぐらいだぜ。」

蛇神と十六夜は一式触発の状態に入っていた。

これは俺の出番はないな・・・。

―――――――――――――――

『ぐっ!!』

「おらおらどうしたぁ！この程度かよ!?」

なんて事を続けていると、髪の色が変わった黒ウサギがやって来た。

「ええっと、確かこの辺・・・。」

「お前、もしかして黒ウサギか？随分変わったな。」

「ああっ!?結城さん！もうっ一体何処まで来ているんですか!!」

「あ～すまん黒ウサギ、せっかく箱庭に来たんだ、世界の果てをどうして見たくてな、

今度しっかり償うから許してくれないか？」

頭を下げ黒ウサギに謝罪する。

「ええっ!?そ、その・・・分かってくれればいいんです！

黒ウサギも言い過ぎました！だから頭をあげてください!!」

「本当か？ありがとう黒ウサギ」ニコッ

俺がそう言うと黒ウサギは顔を赤くする、なんだ？過呼吸か？

ザバアァァァァァン!!!!

音がした方を見て見ると、十六夜がどうやら勝ったようだ。

「お疲れ、十六夜ってそれほど疲れてないか。」

「ヤハハ、当たりまえだ、だが準備運動程度にはなったかもな。」

「い、十六夜さん！心配したのですよ！

勝手な行動をしないで下さい!!」

「お前黒ウサギか？わりぃわりぃ。

しかし俺たちに追い付くなんていい足を持ってるな。」

「むっ、それは当然です。

黒ウサギは【箱庭の貴族】と呼ばれる貴種なのですから。

その黒ウサギが・・・あれ？」

黒ウサギは首を傾げた。

恐らく自分が半刻以上もの間、追い付く事が出来なかった事に疑問を感じているんだろう。

「と、とにかく御二人がご無事でよかったです、森の幻獣達から二人が水神にゲームを挑んだと聞いて、

ヒヤヒヤしました。」

「「水神？もしかしてあれの事か？」」

『まだ、まだ試練は終わっていないぞ小僧!!!!』

「じゃ、蛇神!?って！どうやったらここまで怒らせられるのですか!!」

「なぁに、こいつが偉そうに試練を選べって言ってきたから返り討ちにしてやっただけだ。」

『いきがるなよ!!小僧!!!』

そう言うと、蛇神は巨大な竜巻を作り出した。

洪水、土砂、暴風、人間の災害をまとめて一つにしたようなものだな。

だが、これくらいじゃあ十六夜にはかすり傷さえ与えられないな。

「っ!?十六夜さん下がって!!」

「バカな事を言うんじゃねえ黒ウサギ。

下がんのはてめえの方だろうが。

これは俺が売って、奴が買ったケンカだ！邪魔するならお前からぶっ飛ばすぞ！黒ウサギ！」

そう言って黒ウサギを怯ませた。

『その心意気は買ってやろう。

それに免じ、この一撃を防げば貴様の勝利を認めてやる!!』

「ハッ！さっきも言ったが寝言は寝て言え。

決闘ってのは勝者を決めて終わるんじゃない、敗者を決めて終わるだよ!!」

『フンッ！その戯れ言が貴様の最期だ!!』

そう言うと竜巻は更に威力を増し、接近した。

「十六夜さんっ!!!!」

「カッ！しゃらくせえぇ!!」

そう言うと十六夜は、巨大な竜巻を――拳でかっ消した。

しかし、まだ巨大な一本がこちらに迫って来ていた。

「十六夜！消すなら全部消せ!!」

「ヤハハ！お前も少しはやってみろ！」

ハァ・・・仕方ない。

俺はそう思うと、足に力をほんの少し入れて覇気を纏い、竜巻を蹴りあげた。

ドッッパァァァァン!!

「嘘!?」

『バカな!?』

「ま、なかなかだったぜ、お前。」

そう言って、十六夜は蛇神を気絶させた。

「クッソ、今日はよく濡れる日だぜ・・・クリーニング代は出るんだよな?黒ウサギ?」

「十六夜、よかったら乾かそうか?」

「おっ、まじか!頼む。」

俺は指を鳴らし、十六夜についていた水をすべて払った。

「サンキュー結城、お前こんな事も出来るんだな。」

「まあな。大概の事なら出来るぞ。」

「へぇ・・・やっぱ面白いな、結城。

それより、おい黒ウサギ、何ボーッとしてんだ?そのままだと胸とか足とか揉むぞ?」

「えっ?きゃあ!?あ、貴方はお馬鹿ですか?

ニ百年守って来た黒ウサギの貞操に傷をつけるつもりですか!?

「二百年守って来た貞操？やべ、超傷付けたい！」

「黙らっしゃい！このお馬鹿様！」

スパンッ!!と良い音を立てて巨大なハリセンで叩かれる十六夜、どっから出したんだ？

「十六夜・・・少しは自重しろ。」ポスン

そう言って十六夜の頭を軽く叩く。

「ヤハハ、冗談だぜ？」

その割りには目が本気だったぞ・・・。

さて・・・黒ウサギに聞きたかった事を聞くか。

だが、その前に・・・・・

「お～い蛇神、大丈夫か？」

俺は十六夜が倒した蛇神の元に行き、状態を確認した。

『ウッ・・・・・に、人間の小娘か、なんだ？我を笑いに来たのか・・・？』

蛇神は弱々しい声と態度で話かけてきた。

「いや、知り合いがやり過ぎたからな、そのお詫びだ。」

俺はそう言って能力で仙豆と虹の実を作り、蛇神に渡す。

『こ・・・これは?』

「この豆は仙豆といって治療にもってこいの能力をもった豆だ。

まあ食べれば分かる、ほら、口を開けろ。」

俺は蛇神の口を開けて仙豆を放り込む。

『ゴクッ・・・な、なんだと!?傷が・・・!』

仙豆を飲み込んだ瞬間、蛇神の傷が一瞬にして治った。

「治ったようだな、よかったよかった。」

『・・・・・なぜこんな事をする。』

蛇神は警戒する様な目で俺に聞いてきた。

「別に怪我をしている奴を治すのに理由はいらないだろ?

それに最後の攻撃は中々良かったからな、そのお礼だ。」

『・・・お前は変わっているな。』

「ハハ、よく言われるな。

だが、まだまだ甘いぞ、もっと強くなれ。

これはその激励だ。」

俺はそう言って虹の実を差し出す。

『・・・優しいのだな、小娘。』

「・・・なあ、さっきから言おうと思っていたんだが・・・

俺は男だ。」

『な、なんだと⁉

それは本当か⁉』

「本当だよ・・・。」

もうなれたと思ったんだが・・・ここまで驚かれると流石にくるな・・・。

「まあ、これで言いたいことは終わりだ、またな、蛇神。」

優しく笑ってこの場を去る。

『っ／／／、ああ、またな・・・。』

～主人公Ｓａｉｄ　Ｏｕｔ～

・・・なんとも不思議な奴だ。

また会えるといいな・・・今度は人の姿で・・・。

～蛇神Ｓａｉｄ　Ｏｕｔ～

～神々の親友がコミュニティの現状を知るそうですよ？～

蛇神とのゲームも終わり十六夜と森の中を通って帰っていると、黒ウサギが戻ってきた。

「黒ウサギ、随分遅かったな、何をしていたんだ？

随分嬉しそうだが・・・。」

黒ウサギは、ルンルン♪なんて音が出そうな位ご機嫌だった。

「それがですね！見てください！」

そう言って黒ウサギが出したのは一目で分かる程の立派な木の苗だった。

「お二方が水神様のギフトゲームに勝利をなされましたので、報酬を頂きに行ったのですが、

その時に水神様が結城さんについて『詳しく教えてくれ！』と言われたので、

「結城さんは黒ウサギが箱庭にお呼びした方ですが・・・。」と答えましたら、

嬉しそうな顔で、こんなにも立派な水樹の苗をくださました♪」

と、黒ウサギは嬉しそうに語っていた。

・・・横で十六夜がこっちを見てニヤニヤしているのが腹立つな・・・。

「これで他のコミュニティから水を買う必要もありません！

皆、大助かりなのです！」

黒ウサギは嬉しそうに水樹に頬擦りしている。

だが、結城は黒ウサギの喜んでいる姿を見て、予想している事が確信に変わった。

チラリと横を見ると、十六夜も同じようだった。

ピョンピョン跳ねて喜びはしゃいでいる黒ウサギに、十六夜が話しかけた。

「そうかいそうかい、じゃあ喜びついでに一つ聞いてもいいか？」

「俺も聞きたい事がある。」

俺と十六夜が黒ウサギに質問する。

「どうぞどうぞ♪

今の黒ウサギは何だって答えますよ♪」

おいおい・・・チョロいな・・・。

これじゃあ不味い事を聞かれても断れないぞ・・・。

「・・・・ 黒ウサギ、お前何か決定的な事を隠してるよな？」

「俺達は箱庭がどんな所で、どんな事をするという事は聞いたが、お前達の事を詳しく聞けてないぞ。」

「「黒ウサギ、お前は何で俺達を呼び出す必要があったんだ？」」

俺達は黒ウサギが必死に隠していた事を聞いた。

「そ、それは・・・・・皆様に箱庭でおもしろおかしく過ごして頂こうと・・・・・。」

黒ウサギは、汗だくになりながら、しどろもどろで答えた。

少し震えている気がする。

「・・・・・・本当にそうか？

確かに俺も最初は誰かの遊びかと少しは思ってたぜ。

・・・・だがな、それにしてはお前の態度はあまりにも必死過ぎるんだよ。」

「ああ、十六夜がコミュニティに入れと言われた時に入る事をためらったら、

むきになって怒鳴ったり、この世界での水の価値がどうかは知らないが、

水樹が手に入った時の喜び様と、水を買う必要と言う発言が、あまりにも気になったんだ。」

俺と十六夜の言葉に黙って俯いてしまう黒ウサギ。

それを見た姿を見た十六夜が更に話を進めた。

「これは俺達の勘だったんだが・・・今確信に変わった。

黒ウサギ、お前のコミュニティは、弱小チームか、何らかの形で衰退したチームじゃないのか？」

「・・・・・・。」

それを聞いて、黒ウサギは黙ってしまった。どうやら予想が当たったみたいだな。

「沈黙は肯定と見なすぜ、黒ウサギ。」

黒ウサギは、今にも泣きそうな顔だった。

返答を待つ十六夜と俺。

とても静かで気まずい時間と雰囲気が続いた。

～神々の親友が真の理由を知るそうですよ？～

しばらくすると、黒ウサギがゆっくりと話始めた。

「・・・ お二方の言う通り、黒ウサギ達のコミュニティは、壊滅の危機に瀕しています。」

重々しく喋り始めた黒ウサギの言葉に、俺と十六夜は静かに耳を傾けていた。

「先ほどお話したように、コミュニティとは一つの国の様な存在なのです。

それ故に、活動する時には【名】と【旗印】を申告しなければなりません・・・」

「という事は、一つの国のであるコミュニティにとって、

それらは国旗の様な物であり、役割を持っていると見ていいのか？黒ウサギ。」

「ヤハハ、やっぱり結城も頭がかなり回るみたいだな。

俺も同じ事を考えてたぜ。」

「Ｙｅｓ、お二人のその捉え方で間違いございません。

それらは自らのコミュニティの象徴として、多くは領土の誇示に使われます。

数年前まで私達のコミュニティの旗印は、東区の至るところで掲げられ、輝かしい栄光を誇っておりました・・・・」

それを聞いた十六夜の表情が微かに動いた。

十六夜は黒ウサギのコミュニティを弱小チームだと思っていたんだろうな。

「・・・・ですがある日・・・。

私達のコミュニティは、決して敵に回してはいけない物に目をつけられてしまいました。

そして・・・・私達のコミュニティは、一夜にして壊滅させられてしまいました・・・・」

黒ウサギの言葉に俺は少し驚いた。

黒ウサギの強さは中々のものだ。

その黒ウサギが所属していたコミュニティなら、相当な実力があった筈だ。

それを一夜で壊滅させるとはな・・・・。

間違いなく中級神か、下手をすれば上級神位の力はあるな。

十六夜も驚きを隠せないようだ。

「それで・・・・？

結局は何なんだ?そんなに巨大なコミュニティを壊滅させたっていう原因は・・・・・?」

黒ウサギは、何かを決意したかのような表情で息を吸い込むと、俺達の方を見て告げた。

「黒ウサギ達が目を付けられたもの・・・・・・

それは、箱庭に起ける、最強最悪の天災――――【魔王】です。」

【魔王】か・・・魔神や邪神に比べれば弱いだろうな。

魔神なら上級神が複数で、邪神なら最高神が戦う程だからな・・・。

十六夜なんて【魔王】なんて聞いた瞬間に目がキラッキラしてるし・・・・。

だけど【魔王】って・・・厨ニ病っぽいと言うか、ダサい名前だな・・・・。

「マ、マオウだと!?

なんだそれ超格好良いじゃねえか!!

箱庭にはそんな素敵ネーミングで呼ばれている奴等がいるのか!?」

「は、はい・・・それは勿論・・・・」

「十六夜、お前が魔王と言う素敵ネーミングが気に入ったのはわかったから、

とりあえず今は大人しく黒ウサギの話を聞け。」

見ろ、黒ウサギがドン引きしてるぞ。

俺は十六夜を落ち着かせて、黒ウサギの話に戻らせる。

「ア、アハハ・・・ ありがとうございます、結城さん

しかし、十六夜が想像している【魔王】とは少し違うと思います。

【魔王】とは、【主催者権限】と言う特異階級を持つ存在で、挑まれたら最後、

誰もゲームを拒否する事が出来ません・・・・」

拒否出来ない・・・・・。

それはどんなに理不尽な条件や報酬でも、断る事が出来なくなるという事か・・・。

ふ・ざ・け・る・な

俺は魔王に激しい怒りを覚えた。

十六夜も顔をしかめている。

「【魔王】の力は強大でした。

私達は全力で立ち向かったのですが・・・ 結果は惨敗。

ギフトネームに破れた私達のコミュニティは、【旗】と【旗印】を奪

われ、【ノーネーム】となったのです…」

「・・・【名無し】って事か・・・。」

「Ｙｅｓ、現在中核をなす仲間達は一人も残って降りません…。

ギフトゲームに参加できるのは、現リーダーを務めるジン坊っちゃんと黒ウサギだけ・・・。

後の１２０人あまりは、１０歳以下の子供達ばかりなのですよ…。」

まさに絶望的だな。

コミュニティ復興以前に、ギフトゲームに参加さえ出来ないんだから。

しかし疑問が残るな…。

「なら、お前が参加すればいいじゃねえか、黒ウサギ。」

十六夜が俺も疑問に思っていた事を聞く。

確かに黒ウサギなら、そこらのギフトゲーム位クリアできると思ったんだが・・・。

「・・・・・・・・残念ですが、それも出来ません。」

それを聞いた俺と十六夜は首を傾げる。

「黒ウサギを含むウサギ達は、【審査権限】と呼ばれる

特殊な権限を持っている事は、既にお話致しましたよね？」

「ああ、確か目と耳が箱庭の核につながってるってだよな？」

「Ｙｅｓ。

【審査権限】を持つ物が審判を勤めるゲームでは、【ルール違反＝即敗北】となる事が知られています。」

まあ、それが普通だよな。

勝てるゲームも違反を犯せば勝てなくなるしな。

「ですが、【審査権限】を持つ者には、ある致命的な縛りが課せられます。」

「「縛り？」」

「はい。」

一つ　『ギフトゲームの審判を勤めた日より、１５日間はゲームに参加出来ない。』

一つ　『【主催者】の許可を取らないとゲームに参加出来ない。』

一つ　『箱庭の外で行われているゲームには参加出来ない。』

なるほど。

こんな縛りがあるなら、黒ウサギは、ギフトゲームに参加するのは

ほぼ不可能だろう。

なら、唯一の希望である審判業を優先するしかないな。

しかしこんな話の中でも、問題児はやらかした。

「正に崖っぷちだな!!」

「ホントですね!!」

「十六夜!?ここそんなに軽く言える所じゃないぞ!?

黒ウサギもやけになって乗るな!!」

もの凄い明るい笑顔で十六夜に返す黒ウサギ。

だが次の瞬間、これでもかというぐらい凹んだ。

だったら返すなよ・・・。

「それでも、私達は皆必死になって生きています。

子供達は毎日遠くの川に水を汲みに行き、住む所は作物すら根付かない死んだ土地だというのに・・・」

「へぇ・・・・・」

まさか、そこまで酷い状況に陥っているとは。

俺と十六夜は話を聞き、顔をしかめていた。

すると十六夜が何かに気づき、黒ウサギに向かって言った。

「そんなに酷い状況なら、いっそコミュニティを潰して一からｙ「そ、それは絶対駄目です!!!」

・・・・何でだよ？」

黒ウサギは、今まで見た中でも一番真剣に叫んだ。

「私達はっ！・・・・・仲間達が帰ってくる場所を守りたいのです!!

そしていつの日か！【魔王】から【名】と【旗印】を取り戻し！コミュニティ再建を果たしたいのです!!

そしてその為には・・・・・」

俺と十六夜のいる場所に詰め寄り、必死な表情で悲願してきた。

「十六夜さんや結城さんの様な強力な力を持つプレイヤーに頼る他ありません!!

お願いします!!私達に力を貸して下さい!!!」

黒ウサギは少し泣きながら、必死に頼んでいる。

十六夜は顎に手を当て、考えている。

「ふぅん・・・・【魔王】相手にコミュニティ再建か・・・・。」

既にボロボロな状態の黒ウサギ。

その姿はとても痛々しく、見るに絶えないものだった。

しかし十六夜は、そんな黒ウサギに手を伸ばした。

「・・・・・・・・いいな、それ。」

「えっ？」

一瞬呆けた表情になる黒ウサギ。

『えっ？』じゃねえよ。協力するって言ったんだよ。

喜べ黒ウサギ、寧ろ発狂しろ。」

「十六夜、こういう時位真面目にしろ。」

「ヤハハ、ほんの軽いジョークだ。

・・・・それでだ、俺はお前に協力するぞ？」

「で、ですが・・・・。」

【魔王】相手に【名】と【旗印】を取り戻す。

いいね・・・・・そいつはとてもロマンがある。

協力する理由としては相当な部類だろ？」

・・・・ まったく、十六夜は相変わらずだな。

「ま、精々期待してろよ？黒ウサギ。」

その言葉を聞いた瞬間、黒ウサギの髪が鮮やかな緋色に変わった。

こういう風に変わるんだな・・・。

「ありがとう・・・・ ございます・・・・」

目に涙を溜めて笑みを浮かべる黒ウサギ。

とても嬉しそうだ・・・・・けど。

「それで？結城。

お前はどうすんだ？勿論はいｒ「いや、俺は入ると決めた訳じゃないぞ。」なっ!!?」

黒ウサギと十六夜は、驚愕の表情で此方を見た。

「だってそうだろ？簡単に言っているが、俺達がこの事を知らずにコミュニティに入ったまま、

説明を受けずにいたら、俺達は【魔王】に殺されてしまう事を知らずに、そのままコミュニティに

入る事になってたんだぞ？

確かにこんな事を話せば入ってくれるプレイヤーなんて０だろう。

だからといって、こんな相手を嵌める様な行為をしていい理由にはならないはずだ。

なっ？黒ウサギ。」

「そ、それは・・・・・。」

「魔王に挑む、聞けば響きはいいが、やる側からすれば自殺行為だ。

不釣り合いにも程がある。」

「てm「待ってください！十六夜さん!!」・・・・ 黒ウサギ？」

「確かに結城さんの言う通りです・・・。黒ウサギはあなた方を

騙そうとした挙げ句、命の危機に去らせようとしました・・・・。

どれだけ謝罪しても、償えるものでは有りません・・・。

本当に申し訳有りません・・・。」

黒ウサギは、誰か見ても申し訳無さそうに謝罪をした。

涙まで流している。

しかし、次の瞬間！

「ですが、コミュニティを再建して仲間の居場所を取り戻すという

この想いは！絶対に嘘では有りません!!

あんな事をした私を、許して下さいなんて、そんな事は申しません

!!

ですが！コミュニティを復活させるには、結城さんは絶対に必要なんです!!

どうか、お願いします!!私はもう嘘はつきません!!

もう一度、私の仲間になってくれるチャンスを下さい!!!!」

黒ウサギは一切の迷い無き顔と信念で悲願してきた。

それを見た結城は、

「・・・・やっと本当の自分を出せたね、黒ウサギ。」

まるで、すべてを包み込む様な優しい微笑みで黒ウサギを撫でた。

「ゆ、結城、さん・・・？」

「生きる者は誰もが本当の自分を隠し、取り繕う。

嫌われたくない、何とかしないと、理由は様々だ。

――だけどね、本当の自分を出さない限り、本当に信頼しあえる仲間にはなれない。

そして、俺は本当の黒ウサギをから「仲間になってくれ。」と言われた。

【罪を憎んで人を憎まず】・・・本当に大切な事は、本当の自分で何かをやり遂げる事だよ。」

「そ、それじゃあ・・・・・・・・・！」

「ヤハハ！やっぱり最高だぜ!!お前は!!」

少し離れてゆっくりとクルリ回り、新しい【親友】に挨拶をする。

「改めて、俺は【嘘を嫌い、偽善を許さない、親友好きの変わり者、

神谷　結城】です。

黒ウサギ達のコミュニティ再建の為、黒ウサギの【親友】になり、

助けあう事を誓おう!!!」

――今ここに【ノーネーム】という最下級のコミュニティに、

すべての神をも凌駕する者が仲間になった。――

～神々の親友がサウザントアイズに行くそうですよ？～

ここは神界。様々な神々が存在する場所。

そんな神界のある所に、ある神が座っていた。

「ふふ、やっぱり結城君は素晴らしいね。

さすがは僕たち、【神々の親友】だ。」

この神の名は【ゼウス】

最高神の一人であり、結城を転生させた張本人である。

そんな彼にある存在が近づいていた。

「お主は相変わらず軽いのう・・・ゼウスよ。」

一人は長い髭を携え、つばの広い帽子を被り、たくましい体を持った老人だった。

「全くだ。少しは自覚してほしいものだな。」

もう一人は美しい鎧を纏い、長い髪をたなびかせた絶世の美女だった。

ゼウスはその二人を見て笑顔で話かけた。

「やあ♪オーディンにアテナ、久しぶりだね。」

そう、この二人もゼウスと同じく最高神であり、北欧神話とギリシア神話に登場する神である

【主神オーディン】と【知恵と戦略を司る神アテナ】だった。

「確かにのう。

たった5年程の年月で久しく思えるとはのう。」

「それもこれも、全ては我らの親友である結城のおかげだな。

あの１０年間は本当に楽しく感じたぞ。」

「はは、君達は特に結城君に熱心に教えてたしね。」

「ああ、あの時にお前がわしらに『ある人間に修行をつけてあげてくれないか。』と言った

時は本当に驚いたわい。」

「本当だ。何の冗談かと思ったぞ、ゼウス。」

「じゃが、結城には本当に驚かされたわい。

わしらの課題に泣き言一つ吐かずに、常に最高の結果を出しておったからの。」

「そうだな、あの時に少しでも結城を疑った自分が情けないと思ったぞ。

結城が異世界に旅立つと聞いた時はなんとがっかり・・・はっ！違う違う！」

「ふふ、顔が赤いよ♪アテナ。」

「そうじゃぞ♪お主は結城に少なからず惚れておったからの。」

二人は微笑ましい表情でアテナを見ていた。

「うぅ・・・／／／」

「まあ、結城君なら大丈夫さ。実力なら僕たち最高神と同じかそれ以上だし、

どうせ二人も結城君に加護を与えたんでしょ？」

「ホッホッ、当たり前じゃ。」

「ああ、というか、全ての神達が加護を与えていると聞いたぞ。」

「そうかい、それなら安心だね。

じゃ、今日はこのへんにしようか。」

「そうじゃな、お邪魔したの、ゼウス。」

「うむ、またな。」

そう言って二人は消えた。

「どうやら僕以外の神達も、結城君の事が心配みたいだね。

でも大丈夫さ。そんな事がないように、結城君の特典にあれをつけたんだからね。

頑張ってね、結城君。」

そう言ったゼウスの目は、優しい慈愛に満ちていた。

一方その頃、結城はかなり騒がしい状況の中にいた。

「・・・・・・な、なんであの短時間で【フォレス・ガロ】のリーダーと接触して、しかも喧嘩を売る

なんて状況になったのですか!?」

今までの事を含めて説明すると、あのあと黒ウサギは俺がコミュニティ入ると言ったら物凄く喜び、飛び込んで来たので

戸惑ったが、暫くして落ち着き、『飛鳥と耀にもしっかりと説明して謝れよ』と約束した後、ここから箱庭の都市まで戻るのは

少し時間がかかるため、俺の能力で【聖女の衛騎士ユニコーン】を召喚して箱庭の都市の入り口に繋いでもらった。

余談だが、その時に黒ウサギは物凄く驚き、十六夜はめちゃくちゃ楽しそうだった。

で、無事に飛鳥達と合流出来た訳だが、どうやら【フォレス・ガロ】というコミュニティのリーダーの【ガスパー】という奴から既に黒ウサギの

コミュニティの状況は聞かされたらしく、こちらのコミュニティに来ないかと言われたが、飛鳥達は断り、

ガスパーのコミュニティがしてきた事を飛鳥の能力で強制的に喋らせた所、様々なコミュニティから人質をとって無理やり参加させた挙げ句、

その人質達はもう殺していて、それを怒った飛鳥達は激しい怒りを覚え、【フォレス・ガロ】とギフトゲームをする事になったという。

「しかもゲームの日取りは明日⁉

それも敵のテリトリー内で戦うなんて！

私達に準備する時間もお金もありませんよ‼

聞いているのですかっ‼御二人ともっ‼」

「「むしゃくしゃして喧嘩を売った。反省はしているけど後悔はしていない、ごめんなさい。」」

「黙らっしゃい‼このお馬鹿様方っ‼」スパァン‼

まるで最初から打ち合わせたコントのような会話だな・・・後黒ウ

サギ、そのハリセンはどこから出したんだ？

「まぁ良いじゃねえか。見境なく喧嘩を売った訳じゃねえんだから許してやれよ。」

「い、十六夜さんはいいかも知れませんが、このゲームで得られるのは、

単なる自己満足なのですよ!?だ・だって人質の方達はもう・・・。」

そう、飛鳥達の話を聞く限り人質達はもう殺されている。

この事は自然にしれわたり、何もしなくてもこの悪事は暴かれるだろう。

しかし俺はこの箱庭に来て一番の怒りを覚えていた。

抑え込んでいるが、そのまま出せば、人を殺せるぐらいの怒りを抱えていた。

「そう、もう人質の人達はこの世にはいないわ。

だけどね、黒ウサギ。私はそんな外道が平然な顔をして生きている事が許せないの。

それに放って置けば、黒ウサギのコミュニティも確実に被害が出るわ。」

「・・・・・はぁ、分かりました。

もとをいえば私達のコミュニティを隠していた黒ウサギが悪いで

すし、

それに【フォレス・ガロ】程度なら十六夜さんか結城さんの一人だけでｚ「何言ってんだ？俺は出ねえぞ。」・・・えっ!?」

十六夜の発言を聞いて驚愕の声をあげる黒ウサギ。

「えっ!?じゃねえよ黒ウサギ。

いいか？さっきも言ったがこの喧嘩はこいつらが売って、相手が買ったもんだ。

俺が手を出すのは無粋ってもんだろ？」

「あら、よくわかってるじゃない。

当然よ。あなた達なんて参加させないわ。」

「ゆ、結城さんからも何か言って下さい!!」

黒ウサギが俺に助けを求めてくる。

「・・・確かにこのゲームにおいて、俺達は部外者だ。

あまり手を出すものではないだろう。」

「ゆ、結城ｓ「だが、黒ウサギのコミュニティの現状を知った後に、何の断りもなく

コミュニティの存在と誇りをかけて戦うのは、少し勝手だと思うぞ、二人とも。」・・・結城さん。」

「っ!!・・・・そうね。

それは確かに勝手だったわ、ごめんなさい、黒ウサギ。」

「・・・・・・ごめんなさい。」

飛鳥と耀は俺が注意すると、黒ウサギに謝る。

「い、いえいえそんな！元はと言えば黒ウサギが悪いのですし!!」

「・・・だけど、飛鳥と耀はこれから苦楽を共にする仲間だ。

二人を信頼する事も大切なんじゃないか？黒ウサギ。」

それを聞いた黒ウサギはハッ！としたような顔をした。

「そうですね、・・・飛鳥さん、耀さん。

明日のギフトゲーム、頑張って勝利してください!!

黒ウサギは必ず飛鳥さん達が勝つ事を信じています!!」

「ふふ、安心して、黒ウサギ。

私達はあなたのコミュニティの誇りと存在をかけて戦うのだから、

絶対に負ける気はしないわ。」

「・・・・・・私も、仲間の為だもん。

全力で・・・・勝つ！」

そう宣言する二人の顔は、とてもいきいきしていた。

「で、この後どうすんだ？黒ウサギ。

コミュニティに戻るのか？」

十六夜が黒ウサギに質問する。

「いえ、ジン坊っちゃんはお先にコミュニティにお帰り下さいませ！

黒ウサギ達は【サウザントアイズ】でギフト鑑定を依頼しにまいりますので！」

「サウザントアイズ・・・・予想するにコミュニティの名前か？」

「Ｙａｓ！詳しくは歩きながら説明致しますので。」

そう言われて、俺達は黒ウサギとサウザントアイズに向けて歩き始めた。

～神々の親友が変態と遭遇するそうですよ？～

俺達は黒ウサギから【サウザントアイズ】の説明を受けながら、歩いていた。

「成る程な。つまり【サウザントアイズ】とは特殊な瞳のギフトを持つ奴らが集まる

超巨大コミュニティということで間違いないんだな？黒ウサギ。」

「Ｙｅｓ♪そう解釈していただいてかまいません。」

「へぇ・・・ならギフト鑑定をしてもらう意味は何かあるのか？」

「自分の力をより詳しく正しい形で把握していたほうが、引き出せる力はより大きくなります。

皆さんだって御自分の能力がどんなものか気になるでしょう？」

どうやら三人とも、自分のギフトに興味があるようだ。

俺はギフトの使い方は一通り知っているが、ギフトネームは知らないし、

無いとは思うが、まだ使い方を知らない能力もあるかもしれないしな。

暫くすると、飛鳥が街路樹を指差して疑問を発言した。

「桜の木・・・では無いわよね。

花弁の形が違うし、真夏になっても咲き続けている桜があるわけ無いもの。」

「いや、まだ初夏になったばかりだぞ。気合いの入った桜が残っていてもおかしくはないだろ？」

「・・・・・・？・・・・今は秋だったと思うけど？」

「俺がいたところは季節による変化が無いから、どの季節かわからないな。」

話が噛み合わない俺達は、四人揃って互いに首を傾げた。

そんな俺達を見て、黒ウサギは微笑みながら説明してくれた。

「ふふっ♪皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのです。

元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系等に所々違う部分があるはずですよ？」

「へぇ、【パラレルワールド】ってやつか？」

「いや、少し近いが違うと思うぞ、十六夜。

正しくは【立体交差平行世界論】といって、時間や現象が、

縦や横、斜め、上下に重なっているというものだが・・・これを説明すると一日二日では

たりないからまた今度にしよう。」

「へぇ・・・結城さんってとても博識なのでございますね！」

「いや、知り合いから学ばせて貰ったんだ。」

「あっ！ねえ、あれがそうじゃないかしら？」

そういって、飛鳥は大きな建物を指差して黒ウサギに質問していた。

「Ｙｅｓ！あれがコミュニティ【サウザントアイズ】の支店でございます♪」

その建物には、青い生地に二人の女神が向かい合っている模様が記された旗が見えた。

おそらくあの旗こそが【サウザントアイズ】の旗印なのだろう。

そんな中、割烹着を着た女性定員が店じまいをしている様子が見えた。

黒ウサギは滑り込みでその女性定員にストップをかける。

確かに、もう少し暗いし、この店の営業時間が過ぎてしまったのかもしれないな。

「まっ」

「待った無しですお客様様。

うちは時間外営業を行って下りませんので。」

涼しい顔で黒ウサギに対応する女性定員。

こういった客に慣れているんだろうな。

「なんて商売っ気の無い店なのかしら。」

「ま、全くです!!閉店時間の五分前の客を閉め出すなんて!!」

まあ・・・超巨大コミュニティだし、仕方ないのかもしれないが、少し冷た過ぎないか？

「文句があるならどうぞ他所へ。

貴女方は今後一切の出入りを禁じます。

簡単にいえば【出禁】です【出禁】」

「で、【出禁】!?これだけで【出禁】とかお客様なめすぎで御座いますよ!!」

そんな黒ウサギの発言に定員は冷やかな視線と声色で対応する。

「成る程・・・確かに【箱庭の貴族】であるウサギのお客様を無下にするのは失礼ですね。

中で入店許可を伺いますので、所属しているコミュニティの名前を伺っても宜しいでしょうか？」

「うぅ・・・・・。」

う～ん、どうやらこのコミュニティは【ノーネーム】のコミュニティが利用するのは駄目の様だな。

だが、俺達が【ノーネーム】と知ってこんな態度を取るあの定員も、少しイラつくな・・・。

「俺達は【ノーネーム】というコミュニティなんだか？」

「・・・ほほぅ。

ではどこの【ノーネーム】様でしょうか？

宜しければ旗印を確認させて頂いても宜しいでしょうか？」

まるで悪役のような口調で黒ウサギを問い詰める女性定員。

「そ、その・・・私達に旗印はごZ「イィィィヤッホォォォウ!!久し振りだな黒ウサギ!!」

きゃあぁぁぁ、ぁ」ドボン!!

「「「・・・・・・」」」

突然着物を着た和服の少女が、黒ウサギにフライングボディアタックを決めて、街路脇の水路に落下した。

「・・・おい、女性定員。この店にはあんなドッキリサービスもあるのか？何なら俺も別バージョンで是非。」

「ありません。」

「何なら有料でも。」

「やりません。」

「・・・十六夜、何を真面目な顔して下らない会話しているんだ。」ポスン

俺は軽く十六夜を叩いた。

「し、白夜叉様⁉どうして貴方がこんな下層に⁉」

「そろそろ黒ウサギが来るかも知れんと予想しておったからに決まっておろう！フホ、フホホホホ‼

やはりウサギ達は触り心地が違うのう！ほれ、ここが良いか？ここが良いか⁉」

うわっ！見た目は可愛いのにおっさんみたいだなあの子‼

「と、とりあえず離れて下さいお馬鹿様‼」

黒ウサギは白夜叉を引き剥がすと、十六夜の方へ投げつけた。

そして十六夜は・・・。

「結城！パス！」

「なっ⁉っとぉ・・・おい十六夜！いきなり投げるな！・・・えーと・・・大丈夫？」

「おお、ありがとのう。しかしそこのおんし！

飛んできた初対面の美少女をいきなり蹴飛ばすとは何様じゃ!!」

「ヤハハ、十六夜様だぜ。よろしく和服ロリ。」

「うう・・・どうして私まで濡れなきゃならないのですか。」

「・・・・因果応報・・・ かな。」

ニャ～ニャ『お嬢のいう通りや。』

「・・・とりあえず、黒ウサギと・・・白夜叉さんだっけ？服を乾かすから動かないでくれ。」

俺がパチンと指を鳴らすと、黒ウサギと白夜叉についていた水が綺麗サッパリと乾いた。

「あ、ありがとうございます！結城さん！」

「ありがとの、あと白夜叉さんじゃあなく、白夜叉でよいぞ。」

「貴方、この店の人？」

「おお、そうだとも。わしがこの【サウザントアイズ】幹部様である白夜叉様だ。仕事の依頼ならおんしの

その年の割りに発育が良い胸をワンタッチ生揉みで引き受けるぞ。」

「オーナー、それでは売り上げが伸びません。ボスに怒られますよ。」

白夜叉のセクハラを女性定員が冷静に釘を刺す。

「ふふん。おんしらが異世界からきた黒ウサギの新しい同士か。と、いう事は・・・。」

白夜叉は少しの間、考える様な仕草をした。

「ついに黒ウサギがわしのペットに！」

「なりません!!どういう起承転結があってそうなるんですか!?」

・・・言ってしまえば悪いが、こんなのが超巨大コミュニティの幹部か。

「まあ、冗談はこれくらいにして、話があるのだろう？話なら中で聞こう。」

「よろしいのですか？彼らは旗印を持たない【ノーネーム】のはず。規定では。」

【ノーネーム】だとわかっていながら名を尋ねる、性悪定員に対する詫びだ。ボスに睨まれても

わしが責任を取るし、身元は保証する。いいから入れてやれ。」

女性定員は不満そうに眉を寄せる。それを他所に、白夜叉は黒ウサギを店に入れた。

俺は女性定員に近寄った。

「あ～うちの仲間が色々と迷惑をかけて申し訳ない。」

「・・・・・・いいえ。それよりオーナーもいってましたし、中へどうぞ。」

「そうか、ありがとう。じゃあ今回の依頼料として・・・これくらいでたりるかい？」

俺は少し大きめの革袋を差し出した。

「？・・・っ!!?これは!?」

驚くのも無理はない、袋の中にはオリハルコンやヒヒイロカネ、金貨等が入っていたからだ。

「じゃあ、遠慮無く上がらせてもらうぞ。」

「・・・なぜですか。私が貴女達のコミュニティに対して、あのような態度を取ったのに・・・。」

「・・・確かにあの態度はどうかと思うが、君はこのコミュニティの規定に従っただけだからな。

別に怒ったりはしないよ。【罪を憎んで、人を憎まず】だ。」

「っ!!・・・変わったお方ですね・・・、お名前をお伺いしても宜しいでしょうか？」

「【神谷　結城】だ。親友好きの変わり者と覚えてくれれば良い。」

そういって俺も店の中に入った。

「神谷・・・結城さん・・・／／／。」

そう呟いた彼女の顔は赤くなっていた。

～神々の親友がゲームをするそうですよ？～

「すまぬな、生憎と店は閉めてしまったので私の部屋で我慢してくれ。」

白夜叉に案内され、俺達が入ったのは和室だった。
落ち着きがある雰囲気で結構広く、いい部屋だった。
白夜叉は上座にゆっくりと座ると、俺達を捉え、話始めた。

「改めて自己紹介しておこうかの。
私は四桁の外門、三三四五外門に本拠を構えている
【サウザントアイズ】の幹部、【白夜叉】だ。
この黒ウサギとは少々縁があってな。
コミュニティが崩壊してからもちょくちょく手を貸してやっている
器の大きな美少女と認識しておいてくれ。」

「はいはい、お世話になっております本当に。」

黒ウサギ・・・若干投げやりになってるな、白夜叉も、自分で美少女とか普通言わんだろ・・・。

そんな事を考えていると、隣で耀が小首を傾げて問う。

「その外門、って何？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。
数字が若いほど都市の中心部に近く、同等に強大な力を持つ者が住んでいるのです。
箱庭の四桁ともなると、名のある修羅神仏が割拠する完全な人外魔

境ですね。」

ふむ・・・考えてはいたが、白夜叉程の実力者なら頷ける話だ。

すると黒ウサギが箱庭を上空から見た図を描いて、俺達に見せた。

その図を見た問題児達はそれぞれ口を揃えて、

「・・・・・・超巨大タマネギ？」

「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」

「そうだな、どちらかといえばバームクーヘンだ。」

「お前ら・・・見も蓋もない事いうなよ・・・。」

その証拠に黒ウサギは感想を聞いてガクリと肩を落としていた。

対象的に白夜叉は哄笑を上げて二度三度頷いていた。

「ふふ、うまいこと例える。

その例えなら今いる七桁の外門は一番薄い皮の部分に当たるな。

更に説明するなら東西南北の四つの区切りの東側にあたり、

外門のすぐ側は【世界の果て】と向かい合う場所になる。

あそこにはコミュニティに所属していないものの、

強力なギフトを持ったもの達が住んでおるぞ――――そこの水樹の持ち主等な・・・。」

白夜叉は薄く笑って黒ウサギの持つ水樹の苗に視線を向ける。

おそらく、【トリトニスの滝】を住処にしていた蛇神の事だろうな。

あまり強くはなかったが・・・普通に考えれば確かになかなか強い部類だろう。

「して、一体誰かどの様なゲームで勝ったのだ？
知恵比べか？それとも勇気を試したのか？」

「いえいえ、この水樹は十六夜さんがここにくる前に、蛇神様を素手で叩きのめしたのですよ。」

黒ウサギが自慢げにいうと、白夜叉は声を上げて驚いた。

「なんと!?クリアではなく直接的に倒したとな!?
ではその童は神格持ちの神童か？」

「いえ、黒ウサギはそうは思えません。
神格なら一目見ればわかるはずですし。」

「む、それもそうか。
しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、
互いの種族に余程崩れたパワーバランスがある時のだけなはず。
種族の力でいうなら蛇と人ではドングリの背比べだぞ。」

「神格って何だ？」

「神格とは種の最高のランクに体を変幻させる強化系のギフトの事を指します。
蛇に神格を与えれば、巨大な体を持つ蛇神になったり、
人に神格を与えれば現人神や神童になったり、
鬼等に与えれば天地を揺るがす鬼神と貸したりします。
神格を持てば他のギフトを強化されるので、箱庭の上層部を狙うコミュニティの多くは
神格を手に入れる事を第一目標にしている事も多いのですよ。」

【神格】か・・・神界にいた皆はほとんど持ってたな。

最高神の皆なんか比べものにならない位持ってたし。

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか？」

「知り合いも何も、アレに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だがの。」

小さな胸を張り、呵々と豪快に笑う白夜叉。

おいおい・・・そんな事言ったら・・・。

「へえ？じゃあオマエはあの蛇より強いのか？」

「ふふん、当然だ。私は東側の【階層支配者】だぞ。
この四桁以下にあるコミュニティでは並ぶ者がいない、
最強の【主催者】なのだからの。」

最強の主催者――――その言葉を聞いた十六夜、飛鳥、耀の三人が目を輝かせた。

あ～あ・・・やっぱりこういう展開になるのかよ・・・。

「そう・・・・・・ふふ。
ではつまり、貴方のゲームをクリア出来れば、私達のコミュニティは
東側最強のコミュニティという事になるのかしら？」

「無論、そうなるのう。」

「そりゃ景気のいい話だ。探す手間が省けた。」

三人は闘争心剥き出しの視線で白夜叉を見る。

白夜叉はそんな問題児を見て高らかと笑った。

「抜け目のない童達だ。

依頼しておきながら、私にギフトゲームを挑むと？」

「ちょっ!?ちょっと御三人方!?」

白夜叉・・・こうなる事になると絶対わかっててやったな・・・。

すると、白夜叉はずっと黙っている俺に話しかけてきた。

「それで？さっきから黙っておるが、お主はどうするんじゃ？」

白夜叉はそう発言した。

「・・・とりあえず、言わせて貰うと、十六夜、飛鳥、耀、悪い事は言わん。

やめた方がいい。今のオマエ達じゃあ遊びにもならないぞ。」

「何だ？じゃあテメーはやらないのか？」

「あら、ということは逃げるのね、結城君。」

「・・・・・・弱いんだね。」

散々な言われようだな・・・。

「ふふ、そうか。

まあ、ゲームを始める前に一つ確認しておくことがある。」

白夜叉は着物の裾からサウザンドアイズの旗印が入ったカードを取りだし、壮絶な笑みで一言、

「おんしらが望むのは【挑戦】か――――もしくは【決闘】か？」

白夜叉がそう呟いた瞬間、自分たちがいる場所は、白銀の雪原と凍る湖畔

――――そして、太陽が水平に廻る世界だった。

～神々の親友が力を発揮するそうですよ？～

「なっ・・・・・・こ、こいつは・・・・・・!?」

廻る太陽は白、遠く薄明の空には星々が静かに輝いていた。
まるで星を一つ、世界を作り出したかのような奇跡の顕現。
唖然と立ち竦む三人と、静かに立つ少年に、今一度、白夜叉は問いかける。

「今一度名乗り直し、問おうかの。
私は【白き夜の魔王】――――太陽と白夜の星霊・白夜叉。
おんしらが望むのは、試練への【挑戦】か？それとも対等な【決闘】か？」

魔王・白夜叉。
少女の笑みとは思えぬ凄みに、再度息を飲む三人と静かに佇む少年。

【星霊】――――それは惑星級以上の星に存在する主精霊を指す。
妖精や鬼、悪魔等の最上級種であり、同時にギフトを【与える側】の存在である。

十六夜は背中に冷や汗を流しながら、白夜叉を睨んで笑う。

「水平に廻る太陽と・・・・・・・・・・そうか【白夜】と【夜叉】。
あの水平に廻る太陽やこの土地は、オマエを表現してるって事か。」

「如何にも。この白夜の湖畔と雪原。
永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ、私が持つゲーム盤の一つだ。」

白夜叉の【夜叉】とは、水と大地の神霊を指し示すと同時に、悪神としての一面を持つ存在であり鬼神であり、
また、インド神話に登場する【最高神クベーラ】の眷族でもある。
数多の修羅神仏が集うこの箱庭でも、白夜叉は余りにも強大な――【魔王】だった。

「これだけ莫大な土地が、ただのゲーム盤・・・・・・!?」

「如何にも。して、おんしらの回答は？
【挑戦】であるならば、手慰み程度に遊んでやる。
――だがしかし【決闘】を望むのであれば話は別。
魔王として、命の誇りの限り闘おうではないか。」

あいた口がふさがらないとはまさにこの事だろう。
余りにも強大な存在――白夜叉を前にして、問題児達は返事を躊躇った。
このまま戦っても、自分たちは遊び相手にもならないだろう。
普通ならばすぐに挑戦を選ぶが、この三人、十六夜、飛鳥、耀はプライドが普通より高い。
自分たちが勝負を挑んだ手前、何より、結城に警告されても引く所か無視して勝負を挑んだのだ。
そんな状態でこの喧嘩を取り下げるには、プライドが邪魔していた。

しばしの静寂の後、――――諦めた様に笑う十六夜がゆっくり選挙した。

「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉。」

「ふむ？それは決闘ではなく、挑戦を受けるという事かの？」

「ああ。これだけのゲーム盤を用意出来るんだからな。
あんたには資格がある。
――――いいぜ。今回は黙って【試されてやるよ】、魔王様。」

試されてやる・・・か。随分と可愛い意地を張ったな、十六夜・・・。
まあ、プライドの高い十六夜としては、最大限の譲歩なんだろうな・・・。
白夜叉なんて腹を抱えて哄笑してるし・・・。

「く、くく・・・・・・・・して、他の童達も同じか？」

「・・・・・・・・・・ええ。私も、試されてあげてもいいわ。」

「右に同じ。」

苦虫を噛み潰した様な表情で返事をする二人。
そして、白夜叉はさっきからずっと黙っている俺に聞いてきた。

「それで・・・お主はどうするんじゃ？勿論挑戦を選ぶんじゃろ？」

「ん？いや、俺は【決闘】を選ぶ。」

「「「「なっ!?」」」」

この場にいる全員が驚愕した。あれほどの力を見せつけられて、尚挑もうとするのか。
誰もがつまらない意地を張ったと思っている中、白夜叉は違和感を感じていた。

（こやつ・・・・・・さっきから少しも動揺しておらん・・・・・・!?）

そう、結城は全く動揺していなかった。
というのも、結城は神界で１０年間修行していたのだ。
これ以上の事を出来る存在は沢山いたし、体験もした。

【神谷結城】改め【神々の親友】は、これくらいでは、驚きもしないのだった。

「・・・・・・それでいいのだな？おんしは。」

「ああ、よろしく頼む。」

「・・・・・・分かった、ではまず【挑戦】の方から済まそうかの。」

白夜叉が双女神の紋章が入ったカードを取り出す。
すると虚空から一枚の羊皮紙が現れる。

『ギフトゲーム名　【鷲獅子の手綱】

・プレイヤー一覧　逆廻　十六夜
久遠　飛鳥
春日部　耀

・クリア条件　グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う。

・クリア方法　【力】【知恵】【勇気】の何れかでグリフォンに認められる。

・敗北条件　降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓　上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギ

フトゲームを開催します。

【サウザントアイズ】印』

「私がやる」

読み終わるや否やピシッ！と指先まで綺麗に伸ばして選挙したのは耀だった。

・・・・・いつも無関係な態度をしてるのに・・・人が変わった様にグリフォンを見てるな・・・。

『お、お嬢・・・・・大丈夫か？なんや獅子の旦那より遥かに怖そうやしデカイけど。』

「大丈夫、問題ない。」

・・・・・そのセリフを聞くと、限り無く問題がありそうな気がするのは俺だけか？

「ふむ。自信がある様だが大丈夫か？
これは結構な難問だぞ？失敗すれば大怪我では済まんが。」

「大丈夫、問題ない。」

・・・ああ、こりゃもう何をいっても無駄だな。
もうグリフォン以外見てないし・・・目が凄いキラキラしてるぞ・・・・・。

「ＯＫ、先手は譲ってやる。失敗すんなよ。」

「気をつけてね、春日部さん。」

「うん、頑張る。」

皆が耀に応援の言葉をかけてる中、俺はちょっとしたセーターを創造し、耀に渡す。

「耀。」

「・・・何？」

「さすがにその格好じゃあきついだろう。せめてこれを羽織って行け。」

「っ！あ、ありがとう・・・。」

そして耀はグリフォンに跨がる。

すると十六夜がニヤニヤしながらこっちを見ていた。少しイラついた・・・。

そして、耀のギフトゲームが始まった。
グリフォンは耀をを乗せて、空を踏みしめて走っていた。
氷山に差し掛かった所で、一気にグリフォンの速度が加速した。
さっき耀とグリフォンが何か会話していた為だろう。
この時点で、グリフォンは驚愕と困惑の感情が沸き上がっていた。
羽ばたく際に発生する衝撃とマイナス数十度の冷気を受けて尚、しがみついていた少女に驚きを隠せなかった。
残り後少しの所でグリフォンは速度を倍にしていた。
耀は険しい表情になりながらも、必死に手綱を掴んでいた。
そして、湖畔の中心まで疾走したグリフォン。耀の勝利が決まった

――次の瞬間！
春日部耀の手から手綱が外れた。
「か、春日部さん!?」
そう叫ぶや否や、黒ウサギは耀を助けようとしたが、十六夜に手を捕まれた。
「は、離し――」
「待て！まだ終わっていない！」
誰もが春日部を助けようとした瞬間――春日部の体が宙に浮いていた。
「・・・・・・なっ!?」
この場にいる者がほとんど絶句した。
そのまま戻ってきた春日部に呆れたように笑って近づいて来たのは十六夜だった。
先ほどの耀のが見せた力は、耀が持っていたペンダントの力だという。
何でも耀の父が彫刻家で、その父から貰ったペンダントのお陰で春日部は動物達と話せるのだという。
白夜叉が耀のペンダントを見て興奮し、売って欲しいと耀に頼んでいたが、あっさり断られ、
お気に入りの玩具を取り上げられた子供のようになっていた。
すると耀がこっちにきた。
「結城・・・これ・・・ありがとう・・・。」
そう言って差し出して来たのは、ギフトゲームが始まる前に渡した

セーターだった。

「これのお陰で・・・とても暖かかった・・・ありがとう。」

「いや、それはあげるよ。
それは体温調節と衝撃緩和の効果を付加させてるから今後も役にたつだろうし。」

「本当!?ありがとう・・・・!」

「まあ、ギフトゲームクリアのご褒美だと思ってくれ。」

なんてことを話してると・・・。

「おいおい、何イチャイチャしてんだコラ。
つーか春日部だけずりーぞ結城。」

「そうよ。春日部さんだけずるいわ。」

「そのセーターはまだあるのか?あるなら是非買い取りたいんじゃが・・・。」

問題児＋aがきた・・・。

「何いってんだ。さっきもいったろ?
これはギフトゲームをクリアしたご褒美だって。
後白夜叉、そういう商談なら後でな。」

そうやって渋々全員を納得させた後・・・いよいよ俺の番になった。

「さて・・・だいぶ時間をとったが、次はおんしの番じゃな?」

「ああ、よろしく頼む、白夜叉。」

「ふふ、いいだろう。
おんしのギフトゲームはこれじゃ！」

『ギフトゲーム名　【沈まぬ太陽の魔王と決闘】

・プレイヤー一覧　　神谷　結城

・クリア条件　白夜叉との戦いで打ち勝つ事。
白夜叉に己の全てを認めさせる事。

・敗北条件　プレイヤーの死亡、または続行不能になるか、
プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓　上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

【サウザントアイズ】印』

これを見た瞬間、黒ウサギが慌てて白夜叉に詰め寄った。

「し、白夜叉様⁉これはどういう事ですか⁉」

「何の事じゃ？」

「ご冗談を！これは白夜叉様が【魔王】として活動していた時のゲームの一つじゃないですか⁉」

「「!?」」

「はて？そうじゃったかの？」

「と、とぼけないｄ「黒ウサギ、心配するな。」っ！ゆ、結城さん？・・・」

「俺の事なら心配はいらん。
それに忘れたのか？こういうときは止めるんじゃなくて？」

「あっ・・・！し、しかし・・・。」

「黒ウサギ、仲間を信用しろ。
これから一緒に戦うのに、そんな調子でいるつもりか？」

「・・・・・・。」

「黒ウサギ、【俺が白夜叉に負けると想像する自分】より、【俺が白夜叉に勝つと想像する自分】を信じろ！」

「・・・っ!!は、はい！
頑張ってください！結城さん！」

「ああ、いってくる。」

そう言って、俺は白夜叉と対峙する。

「悪い白夜叉、待たせたな。」

「いいや、構わん。
しかし、あの言葉・・・・・・おんし、一体何者じゃ？
あのような言葉は、幾度の死線を越えてきた者しか口に出せんぞ

?」

「それは・・・このギフトゲームでわかる事だろ?」

「・・・・・・!!クハハハハ!

やはり面白いやつじゃの、おんしは!」

「よく言われるよ。」

「クハハハ!なら、私がおんしを見極めさせて貰うとするかの!!!」

そう言った瞬間、白夜叉が動き出そうとしたが、それより速く白夜叉の懐に入り、掌低を撃ち込んだ。

「ゴハアアァァァ!?」

続けて回し蹴りをくり出そうとするが、避けられてしまう。

「ゴホッ!中々やるな・・・今のは僅かだが効いたぞ・・・。」

「ありがとな、だが白夜叉、これは決闘だ。

手加減などもっての他だと思うが・・・・・・?」

「ああ、すまんかったの・・・。

ここからは、太陽と白夜の魔王【白夜叉】として、全力でお主と戦おう!!」

そういった瞬間、白夜叉の姿が消えた。

次の瞬間、横に避けると、自分のいた場所が凄まじい熱気と共に消えていた。

「よく避けたの!!だがまだまだいくぞ！」

そう言って白夜叉はサッカーボール程の炎球を１００位投げてくる。

ちなみにこの炎球一つ一つが地面に当たるたび直径一メートルは消し飛んでいた。

それに対し結城は最小限の動きで避け、そのうち何個かは・・・・蹴り返した。

「何っ!?」

流石の白夜叉も蹴り返してくるとは予想していなかったのか、驚愕の表情で炎球を扇でかき消す。

「今度はこっちからいくぞ！」

そう言って走り出す結城。

「幻想再現・・・・・。」ボソッ

と、呟いた瞬間、結城を迎え撃とうとした白夜叉が驚愕の表情に染まる。

「なっ!?炎が出せんじゃと!?」

狼狽える白夜叉をよそに結城は攻撃を仕掛ける。

「幻想再現・・・・・武装色、硬化！３０連・・・釘パンチ!!」

「ガアアアアアア!?」

ドドドドドドド・・・・・・

白夜叉に３０回ものとてつもない衝撃波が襲う。

ドガアアアアン!!

「グハ・・・・・い、今のは流石に危なかったぞ・・・・・結城よ。
あそこで後ろによけて衝撃を殺さなければ、無事ではすまんかったじゃろうな・・・。」

「流石、元魔王って所だな。まさかあれを即座に見抜くとは・・・。」

「・・・・・・・・・・・!?・・・・・いつ気づいたかは知らんが、喜べ結城!

私がこの力を使ったのは片手で数える程しかおらんからの！
私は全力で・・・・おんしを叩き潰そう!!」

そういった瞬間、白夜叉の周りに白い焔と赤い焔が立ち込める。

「・・・・・それが白夜叉が白夜と太陽の魔王と呼ばれた由縁か。」

「そうじゃ・・・この焔は私自身を表すもので、摂氏１６００万℃は優に超える。
私もこの力を使うのは久し振りじゃ・・・・さあ来い結城!!
この魔王【白夜叉】を倒して見よ!!」

「そうか・・・・なら遠慮なくいかせてもらう！」

「幻想再現奥義・・・神具再現！『太陽神の衣』、『炎神の冠』、『龍王神の神槍』!!

そう叫んだ直後、俺は眩い光に包まれ、光が晴れた瞬間、そこにいる全員が魅了された。

「綺麗・・・・・。」

誰かがそう呟いた。

光が晴れ、現れた結城の姿は・・・・・・・・・。

鮮やかな赤と白の色が入った陰陽師の様な衣を纏い、頭には炎のように揺らめき輝く宝玉が埋め込まれた王冠、

そして手には白く輝き、赤みのある光沢を出す神々しい槍を装備していた。

「お、おんし・・・・・・なんじゃ!?その姿は!?」

白夜叉も暫く見惚れていたが、すぐに正気に戻った。

「白夜叉、今から俺は全力で攻撃する。お前も全力で来てくれ。

・・・・・決着を着けよう、魔王【白夜叉】!!」

「・・・・・!

フフ・・・・面白い！いいだろう！お互いこれが最後じゃ!!」

そうさけんだ後、白夜叉は小さな白い太陽を作り出した。

「はあああああぁぁぁ!!」

白夜叉が全てを飲み込む太陽を繰り出してきたのに対し、俺は全身に力を込める。

「うおおおおおぉぉぉ!!!」

『神速・神威雷光突き!!』

～神々の親友がギフトを知るそうですよ？～

～神界ｓｉｄｅ～

ここは神界。
数多の神々や神獣、英雄などが住む世界だ。
そんな神界のある場所に一人の青年が佇んでいた。

「おっ、どうやら結城は早くも力を使ったようだね♪」

彼の名はゼウス。
神界に住む最高神にして結城を転生させた張本人である。
そんな彼に近づく存在がいた。
しかしゼウスはその存在に気付くと、笑顔で振りむいた。

「やあ、そろそろ来ると思っていたよ♪
久しぶりだね。【炎神ヒノカグツチ】【太陽神アマテラス】【黄龍】」

そう言ってゼウスが迎えたのは、二人の男性と一人の女性だった。
一人目の男性は燃えるような鮮やかな紅い神を持ち、澄んだ蒼い角を生やし、鋭い目を持った
長身の外見をしており、二人目の男性は筋骨隆々と言っても過言ではないほどのたくましい肉体を持ち、
輝く金色の髪をたなびかせ、これまた立派な黄金の角を持った初老の姿をしていた。
そして女性の姿は赤と白の二色を基調とした巫女服のようなものを羽織り、頭には黄金の太陽の様な形をした
冠をかぶり、つやのある黒髪をたなびかせた絶世の美女の姿をしていた。

「ああ、しばらくだな、ゼウス。」
「うん、１０年ぶりくらいだね。」
「ふむ、こうしてみると実に不思議なものだな。我ら神々が１０年などという時間が、長く感じるとはのう。」
「ああ、それもすべてはわらわ達【神々の親友】である結城のおかげじゃな♪」
そうやって雑談を酌み交わしているうちにゼウスが発言した。
「で？三人とも訪ねてきたのは結城が奥義を使ったからかい？」
そう尋ねると三人ともうなずいた。
どうやら目的は一緒の様だ。
「ああ、結城が奥義を問題なく使えるまで成長したとは聞いたが、どうやら今回はわらわ達の能力を使用したようじゃからな。
いてもたってもいられずに来たのじゃ！」
「あはは…相変わらずだねアマテラス…。」
「仕方あるまい、こいつが結城のことになると熱くなるのは今に始まったことではないだろう…。」
「やれやれだな…所で結城がわれらの神具を発動したようだが、問題はないのか？」
黄龍がゼウスにたずねた。
それに対し、ゼウスは笑顔で答えた。

「ああ、それなら大丈夫だよ。
結城は【神具再現】程度ならノーリスクで使えるよ。
もう特典も完全に扱えてるようになってるし、あの【奥義】も使えると思うよ。」

それを聞いた三人は驚愕した表情になったが、すぐに元に戻り、笑顔をうかべる。

「なんと…たった１０年でそこまでとは…やはり結城は何か特別なのだろうか…。」

それに対しゼウスは、

「カグツチ、それもあると思うけど、それだけじゃないよ。
結城は確かに並外れた才能があった、でも、それ以上に努力していた。
どんなに厳しくて辛い修行でも弱音一つ吐かずにね。
だから今の実力があるし、何より僕達神々が惹かれたんだよ。」

「っ！そうだな、私としたことが…すまない。」

そういってヒノカグツチは頭を下げた。

「あはは、別にいいよ。
結城は今を楽しんでる、それが一番重要だからね。」

「ああ、結城はいずれ我々神と肩を並べる存在になるだろう。
そうなれば、我の娘たちの婿になってもらいたいものだな。」

黄龍の娘達とは、朱雀、青龍、白虎、玄武、麒麟のことであり、全

員が女性である。
　そのため、全員が結城に好意を抱いており、黄龍も結城ならと認めていた。

「待て！結城はわらわの婿にするのじゃ！
　貴様の娘たちになどには渡さんぞ!!」

「ふん。貴様のようなわがままな女より我の娘たちのほうが結城にはあっておる。
　貴様はすっこんでいろ。」

「なんじゃと！消し炭にされたいか！
　この金ぴかヘビが！」

「ふん、やれるものならやってみろ。
　この精神年齢５０００年未満娘が！」

　二人の間に火花が散る。
　その様子を見て、ヒノカグツチは頭を押さえ、ゼウスは楽しそうに笑う。

（ふふ、結城のおかげで僕達も以前より打ち解けてるね。
　結城、僕たちはいつでも君を見守ってるよ、精一杯楽しんでね。）

　そうゼウスは微笑んでいた。

～神界ｓｉｄｅｏｕｔ～

その頃、結城は白夜叉とのギフトゲームに勝ったのだが、その後に全員から質問攻めを受けていた。

「なんなんだよ結城！さっきの姿はよ！」

「貴方本当に人間なの!?」

「・・・あれもギフトなの？」

「結城さんっ！詳しく説明してください!!」

「お主、あの力はいったいなんじゃ？見たことも聞いたこともないぞ!?」

と、この様に様々な質問が来たが、何とかはぐらかした。

そしてしばらくして、黒ウサギが白夜叉に本来の目的を話していた。

「それでデスネ、今回は白夜叉様に【ギフト鑑定】を依頼したいのですが・・・。」

黒ウサギがそういった瞬間、白夜叉が顔色を悪くして扇で顔を隠した。

どうやら白夜叉はギフト鑑定が苦手らしい。

「・・・・・・よ、よりにもよって【ギフト鑑定】か・・・。

専門外どころか無関係もいいところなのだがのぅ・・・・・・。」

腕を組み、ウンウンと唸りながら悩む白夜叉。

そして、ゆっくりと目を開いて、俺たちを一人一人ゆっくりみる。

そして、考えがまとまったのか、口を開いた。

「ふむ・・・わしに圧勝した結城は言うまでもないが・・・
他の三人とも素養が高いのは分かる。
しかしこれでは何とも言えんな・・・。
おんしらは自分の【ギフト】をどれだけ把握しておる?」

「企業秘密。」

「右に同じ。」

「以下同文。」

「まだ全ては分からないな・・・。」

「うおおおぉぉぉい!?
・・・・・まあ確かに、仮にも対戦相手だった者に【ギフト】を教えるのが怖いのは分かるが、
それじゃあ話が進まんだろうに・・・・・・
というか結城、おんしさっきすべては分からないといったが、まことか!?」

「ん?ああ、まだおれ自身にどんなギフトが宿っているかは詳しくは分かっていないんだ・・・。
俺自身が知っている能力なら完璧に使いこなせるんだが、
もしかしたら、まだ知らない能力があるかも知れないからな。
だから白夜叉に【ギフト鑑定】を依頼しようと思ってきたんだ。」

白夜叉も他の皆も唖然としてこちらを見ていた。
それもそうだろう。
あの白夜叉と戦い、ほぼ無傷で勝利したというのに、まだ何かある

というのか。
そんなことを考えていた白夜叉だが、頭が痛くなりそうだったので、
いったんその事を考えるのはやめ、最初の問題に戻った。
「まあ、結城の件は置いといてだな、俺は別に鑑定はいらねえぞ。
人に値札を張られるのは趣味じゃない。」
十六夜の拒絶するような言葉に、白夜叉は困ったように頭をかく。
すると白夜叉が、何か考えでも思いついたのか、ニヤリと笑った。
うわっ・・・・・・本当に悪そうな笑い方だな。
もっと自然に笑ったら可愛いと思うんだが・・・。
「ふむ・・・・・。
まあなんにせよ、【主催者】として【星霊】の端くれとして、
【試練】をクリアしたおんしらには【恩恵】を与えねばならん。
ちょいと贅沢なものじゃがコミュニティ復興の前祝としてはちょうど良いじゃろう。」
そういうと白夜叉はパンパンと手を叩く。
すると四人の目の前に、光り輝くカードがふってきた。
そこにはそれぞれの名前と何かが記入されていた。
おそらくこれが俺たちのギフトを表す【ギフトネーム】なのだろう。
「ギフトカード!!」
「なにそれお中元？」
「お歳暮？」
「お年玉？」

「クレジットカード？」

「違います!!
なんでそんなに息ぴったりでボケるんですか!?
ていうか、結城さんも一緒になってボケるとは思いませんでしたよチクショウ!!
この【ギフトカード】は顕微している【ギフト】も収納できる超高価なカードなのですよっ！
耀さんの【生命の目録（ゲノム・ツリー）】だって収納可能で、好きな時に顕微できるのですよっ！」

「・・・・・・つまり超素敵アイテムってことか？」

「だからなんでそんなに適当に聞き流すんですか！
ああ～もうそうですよ超素敵アイテムなんですよ!!」

「黒ウサギもついに投げやりになったな・・・。
まあ、相手が十六夜なら仕方ないよな・・・。」

十六夜に対して怒鳴る黒ウサギ。
そんな黒ウサギを哀れんだ目で見る俺。
そんな中、白夜叉は【ギフトカード】の説明を始めた。

「我ら双女神の紋のように、本来はコミュニティの【名】と【旗印】が記入されるのだが、
おんしらは残念ながら【ノーネーム】だからの。
少々味気ない絵になっておるが、文句なら黒ウサギにいってくれ。」

白夜叉は扇を開きながら、自分を扇ぎながらシレッといった。
すると十六夜は自分以外の【ギフトカード】が気になったのか、

俺や飛鳥、耀を見ながら口を開いた。

「・・・・・・そういや、みんなの【ギフトカード】は何なんだ？」

「あら、それは私も気になるわね。」

「・・・・・・私も。」

そう言っていっせいにギフトカードを見せ合う問題児達。

飛鳥の手には、ワインレッドのギフトカード

【久遠　飛鳥】

【威光】

耀の手には、パールエメラルドのギフトカード

【春日部　耀】

【生命の目録（ゲノム・ツリー）】

【ノーフォーマー】

【厚手のコート　衝撃緩和　低温無効】

十六夜の手には、コバルトブルーのギフトカード

【逆廻　十六夜】

【正体不明（コード・アンノウン）】

「へぇ～みんな名前があんのか・・・・・・。」

十六夜の呟きに白夜叉が答えた。

「その【ギフトカード】は、正式名称を【ラプラスの破片】、すなわち全知の一片だ。
そこに刻まれとる【ギフトネーム】とはおんしらの魂がつながった【恩恵】の名称。
鑑定ができずともそれを見れば大体のギフトの正体がわかるというものじゃからな。」

「・・・へぇ、じゃあ俺のはレアケースなわけだ。」

「なんじゃと？」

そう言って白夜叉が十六夜のギフトカードを覗き込む。

「・・・・・・い、いやありえん・・・そんな馬鹿な。」

原因が本当に不明なのか、白夜叉が眉をひそめたままで呟く。

「【正体不明（コード・アンノウン）】だと・・・・・・？
・・・・・・いいやありえん・・・・・・全知の一片である【ラプラスの破片】がエラーを起こすはずなど・・・・・・。」

「・・・・・・なんにせよ、鑑定できなかった事だろ？
ま、俺的にはそのほうがありがたいさ。」

そう言って十六夜は食い入るように見ていたギフトカードを白夜叉からとりあげた。
白夜叉は納得のいかない顔をしていたが、しぶしぶひきさがった。
そして十六夜は俺のほうを振り向き、興味深そうに聞いてきた。

「まあ・・・・・・俺のギフトなんかよりもっと正体のわからねえ奴が

いるじゃねか。
なあ結城・・・・・・お前の【ギフト】は何なんだ？
いくら考えてもさっぱりわからねえ。」

「確かにそうね・・・・・・白夜叉とのギフトゲームの時も、焔の玉を蹴り返していたし・・・・。」

「・・・・・・それにあの運動神経や反射神経は異常だよ・・・・。
私なんて白夜叉も結城の動きもほとんど視えなかった・・・・・・・。」

「そういえば、結城さんは時々とてつもなく強大な龍を読んだり、とても立派な幻獣を
召喚したりしていましたね・・・・・・・。」

「そして・・・・・極め付きはわしとの決闘で見せたあの姿じゃ・・・・・・。
あれはどう見ても異常なほどの力を感じた・・・・・・・。」

そういって全員が次々と疑問を上げていく。
まあ・・・もっともな反応だな。
仕方ない・・・見せるか。
そう言って俺は自分の【ギフトカード】を差し出す。
すると、全員が興味津々でギフトカードを覗き込んできた。

「俺の【ギフト】はコレだ。」

結城の手にはクリアクリスタルに純金の文字が刻まれたギフトカード

【神谷　結城】
【幻想創造者（イマジンクリエイター）】
【神々の加護】

【神々の親友】
【超越者】
【万物なるもの（メタモルフォーゼ）】
【真の英雄（ヒーロー）】
【全能神】